

## 茨城県つくば市谷田部市街にみる往年のにぎわい

著者	小口 千明, ?橋 淳, 上形 智香, 新宮 千尋, 中川 紗智
雑誌名	歴史地理学野外研究
号	16
ページ	63-97
発行年	2014-03
その他のタイトル	A Focus on the Former Prosperity of Yatabe Town in Ibaraki Prefecture
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00124492">http://hdl.handle.net/2241/00124492</a>

## 茨城県つくば市谷田部市街にみる往年のにぎわい

小口 千明・高橋 淳・上形 智香・新宮 千尋・中川 紗智

## I. はじめに

茨城県つくば市の南西部に、商店や住居が立ち並ぶ谷田部（やたべ）という市街地がある（第1図）。この谷田部市街を歩いてみると、醤油を醸造し販売する商店や自家製の和菓子を販売する商店が立地するなど歴史や由緒を感じさせる雰囲気漂っている。しかし、そのいっぽう、シャッターが降ろされ営業の気配が感じられない店舗が数多く見受けられる事実もまた併存している。大型の路線バスや自家用車、軽トラックなどがこの街並みを貫くメインストリートを頻繁に通り過ぎるのであるが、通行人はきわめて少ない。とりわけ、若年層の徒歩通行や買い物行動がめったにみられない光景となっている。

中山間地域や島嶼部ならば、これは現代日本の随所でみられる過疎化・少子高齢化が進んだ典型的な景観として捉えられるであろう。しかし、実際にはこの谷田部市街は、人口が増加を続けるつくば市内に位置している。また、若年層が集住するつくば市の研究学園地区とは7キロメートルほど隔たるのみである。それにもかかわらず谷田部市街の景観は、よく言えば落ち着きがあるが、商業地区としての活気は乏しいと言わざるをえない。

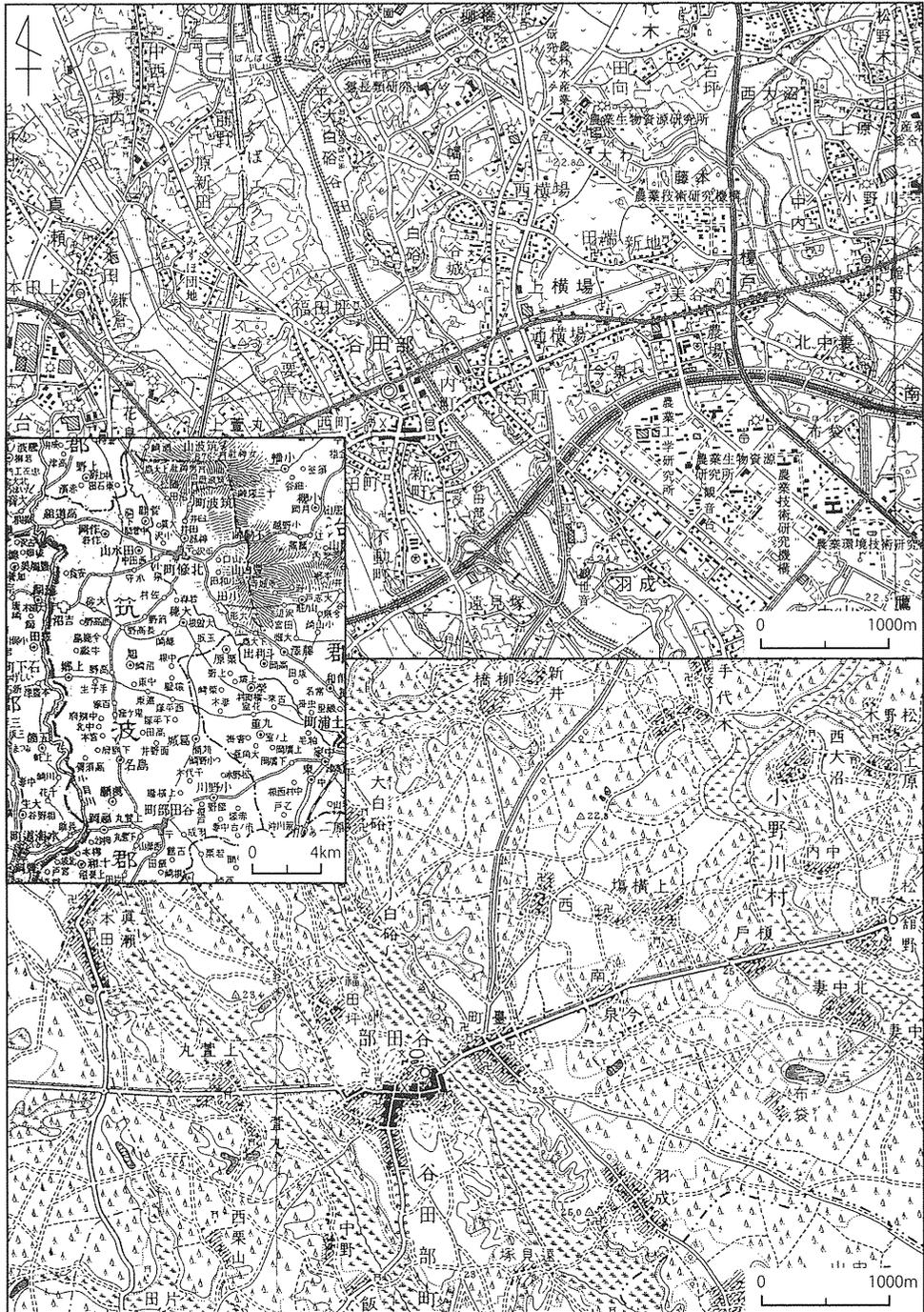
もちろん、現代の商業活動は店頭販売のみで成立するわけではない。店頭は一見静かであっても、じつはインターネットを通じて大量販売が行われている例もあろう。また、学校給食向け販売や学校指定の制服販売等により、安定的に一定量の取り引きが行われている場合も考えられる。このほか、本店での店頭販売よりも、高速道路のサービスエリアや農産物直販所等への出店に重点を置く販売方法をとる商店も存在するであろう。

とはいえ、すべての店舗がこのような販売ルートを確認しているという保証はなく、シャッターを降ろした店舗が多数出現している光景は、商業地区谷田部の苦境を物語っているに違いない。おそらくこの背景には、若年層の人々にとって谷田部の街並みはそれほど「にぎわい」を感じさせず、また、訪れる「楽しさ」をイメージさせない景観として目に映っていることが推察される。

ところがこの谷田部は、かつては商業活動の中心地として、また交通の結節点としてたいへんにぎわい、活気にあふれていた時期が存在した。藩政期には政治・行政の拠点となる陣屋が置かれ、明治期に入ると郡役所とよばれるハイレベルの行政機関が置かれた。大正期には鉄道建設の機運が盛り上がり、昭和戦前期には当時の「花形施設」であった航空隊が置かれるなど、さまざまな面で「光が当たる」町であった。このような歴史的推移のなかで谷田部の「にぎわい」がどのようなものであったかを正しく描くことは、学術的にも地域活動を実践する人々のためにも重要な意義がある。ことに、谷田部市街の今日の景観が活気を失いかけているだけに、歴史的事実を正確に記しておくことは急務である。

今日では、谷田部の町のにぎわいが沈静化した後に生まれ育ったという世代が人口のかなりの割合を占めるようになってきた。その人々の体験にもとづけば、谷田部の町は、自分が生まれ育って今日まで、一度もにぎわった姿を見ていないことになる。この人々に対し、「一度もにぎわったことのない町—谷田部」という認識を植えつけてしまつてよいであろうか。

近年、谷田部地域では、当地の活性化に向けて「谷田部タウンネット」が活動を開始するなど、現況を打破しようとする動きが出現している。そ



第1図 研究対象地域

(上) 平成17 (2005) 年 (5万分の1 地形図「土浦」)

(中) 大正5 (1916) 年 (『大日本分縣地図(大正5年)』, 黒崎千晴・小口千明編『地図でみる県の移り変り(2)』昭和礼文社, 1990, 所収)

(下) 明治39 (1906) 年 (5万分の1 地形図「土浦」)

の担い手の多くは、現有商店の後継者世代に相当する比較的若い年齢層の人々である。このように谷田部の活性化を願う人々にとって、かつて谷田部はいかに活況を呈していたか、また、いかなる状況下でその繁栄に翳りが見え始めたかを知ることは、参照すべき有意義な情報であろう。

谷田部地域の先行研究・参考文献としては、谷田部の歴史編さん委員会編<sup>1)</sup>、谷田部町解散記念事業実行委員会編<sup>2)</sup>や、商業地域としての谷田部の特性を検討した高橋伸夫ほか<sup>3)</sup>の成果がある。これらの文献には有益な情報が含まれるが、必ずしも谷田部市街のにぎわいを歴史的視点から検討したものではない。そこで、本稿では上記各文献の資料を活用しつつ、これらの文献では扱われなかった新たな史資料を用い、谷田部市街におけるかつてのにぎわいの実像を明らかにすることを目的とする。

本稿の構成は、まず中心地谷田部の後背地となる農村地域に着目し、「農村部の暮らしからみた谷田部像」を検討する(Ⅱ章)。次いで、谷田部市街の今日の景観とその移り変わり、さらには中心地谷田部が人々を惹きつける魅力の源泉となった娯楽機能について具体的に検討する(Ⅲ章)。最後に、北条や上郷など、谷田部と競合関係にある他の中心地との比較を行い、歴史的にみて谷田部がいかなる位置づけであったかを検討する(Ⅳ章)。

## Ⅱ. 周辺農村部からみた谷田部市街

### (1) 旧谷田部領と谷田部市街

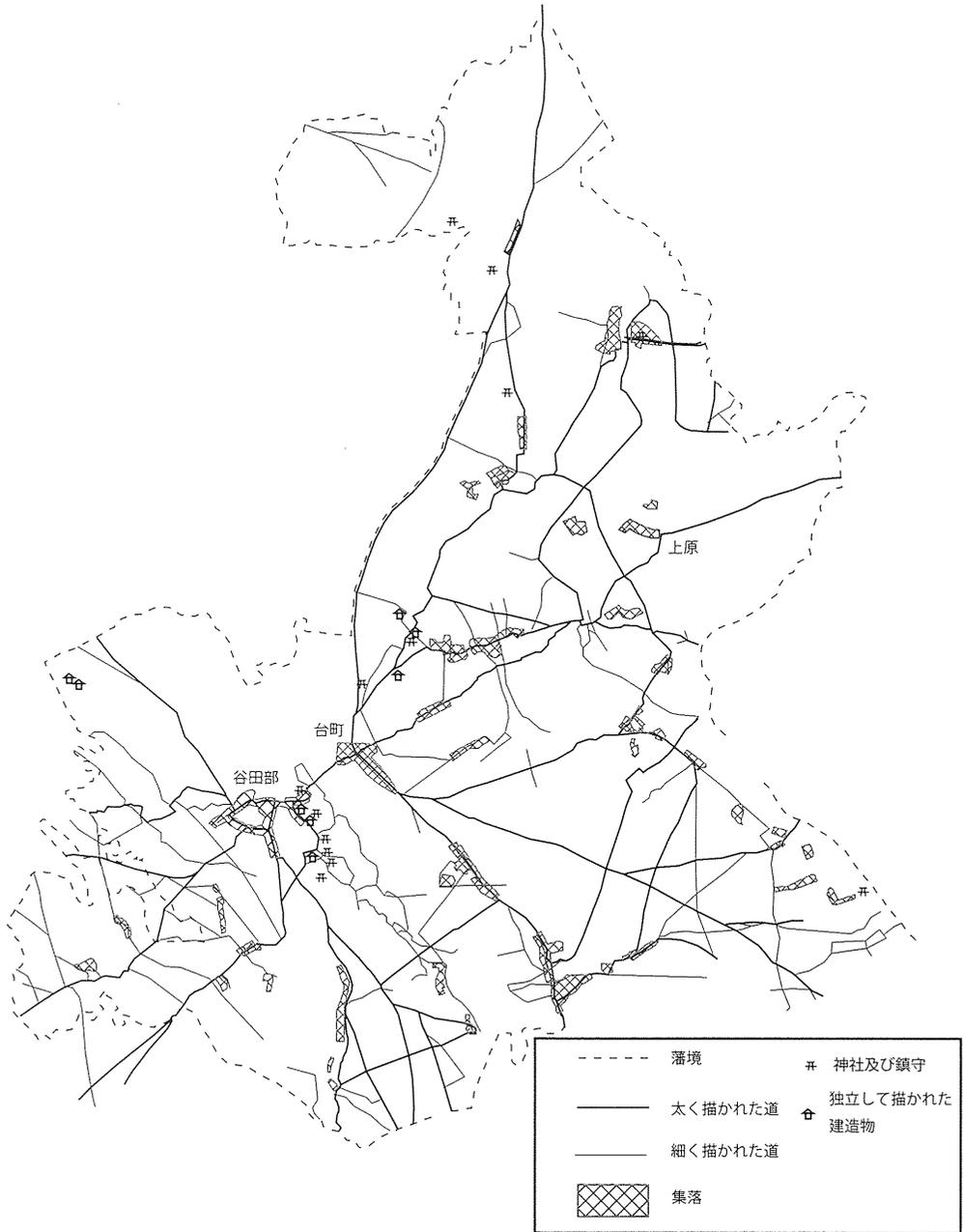
現在の谷田部市街とその周辺地域は、近世には細川氏の支配下にあった。細川氏は茂木(現、栃木県芳賀郡茂木町)と谷田部に領地を持ち、石高は両者合わせて約16,000石であった。しかし、谷田部領内の石高は約6,000石で、谷田部側の領地は広いとはいえない状況であった。その細川氏による支配の拠点となる陣屋は、現在の谷田部市街地内にある谷田部小学校付近に置かれていた。細川氏が治める谷田部領については絵図が保管され

ており、領内の具体的様相を知ることができる。この絵図は、谷田部領内の名主を務めた飯塚家の伊賀七が天明8(1788)年に作成したものとされる<sup>4)</sup>。飯塚伊賀七は和算や計時器具作成で才能を発揮した人物で、測量や天文にも関心が深かったことから、この絵図は伊賀七の測量にもとづく「分間絵図」として作成されている。その意味で、近世谷田部地域の研究において基図となりうる史料である。

この絵図に描かれた主要な地理情報をトレースしたものが第2図である。分間絵図自体は彩色が施され、また、河川や池などの自然的要素ならびに神社仏閣なども記載されているが、本稿では藩境とそれによって確定される領域内の集落分布、および道の配置に主眼を置いてトレースを試みた。とくに、道では凡例はないが、太く描かれた道と細く描かれた道が描き分けられているとみなされるので、トレース図作成に際してはその差異が判明するように表記した。

第2図をみると、谷田部藩政の拠点である陣屋は領内の中央というよりは南西寄りに位置している。陣屋を擁する谷田部集落は、領内各方面に伸びる太く描かれた道、すなわち幹線道路がほぼ集約される地点といえる。ただし、厳密に言えば、領内の北方と東方に伸びる幹線道路は谷田部集落東端の「台町」に集約され、領内の南方と西方に伸びる幹線道路は谷田部集落西端の「西町」に集約される。谷田部集落東端の「台町」と西端の「西町」を結ぶ幹線道路は谷田部中心街の道が一本あるだけとなる。かなりの遠回りをすれば別であるが、「台町」と「西町」は必ず谷田部市街「内町」を通行しないと行き来ができない道路パターンになっていることが指摘できる。

谷田部市街地をめぐるこのような道路パターンが形成される背景として、谷田部地域の地形が関係する。谷田部市街は谷田川の低地に立地しており、水田と湿地が広がる谷田川低地はおおむね北西から南東方向へと伸びている。この谷田川低地は、第2図において谷田部市街の北西から南東に向かう、道路が比較的乏しい地域である。それに



第2図 天明期における谷田部藩領内における主要道路と集落  
 注) 資料上における藩境の欠落は本図においても欠落とした。  
 図中の地名は本稿において必要な地名を筆者が付した。  
 「分間谷田部絵図」(飯塚護家所蔵)より作成。

対し、谷田川低地の北東側と南西側には台地が存在し、低地と台地の境界部は急崖または傾斜地になっている。この急崖等の存在により、低地と台地を結ぶ道路数が限定されることになる。なお、谷田部市街の東端や西端は、この急崖等を坂道として利用するために、主軸道路は遠見遮断と同様の機能を持っている。

谷田川南西部の台地を南西方向にさらに進めば小貝川の低地に達するが、谷田部領はそこまでは広がらない。いっぽう、谷田川の北東方向はしばらく台地が続く。谷田部市街地の周辺は、このように谷田川低地が軸となって両側に台地が広がる「対称性」を持つ地形条件である。そのため、幹線道路の展開も、谷田川低地を軸としたある程度の「対称性」を示している。以上から、谷田部藩の陣屋とそれを擁する谷田部市街は領内の中央とはいえないが、領内に広がる北東の台地と南西の台地を分かち軸線上に位置し、そのため、谷田部市街は迂回路の乏しい、いわば「唯一の生命線」と呼ぶべき幹線道路上に位置しているとみることができる。

## (2) 上原集落の景観

本節では、谷田部地域の特色を検討するために、谷田部という中心地を支える後背地域に焦点を当てる。谷田部を取り巻く農村部の暮らしにおいて、谷田部という中心地がどのように関わりを持つか、具体的には、後背地である農村集落で暮らす人々が谷田部を訪れる頻度や「時」、あるいはその用務内容、さらには、谷田部以外の中心地との差異などを暮らしの実相から明らかにする。

本稿における調査対象集落としては、つくば市の上原（かみはら）を取り上げた（第1図）。上原集落は、つくば市に合併する以前の旧谷田部町に属し、谷田部市街地から北東に約4キロメートルの位置にある。上原集落は、近世には谷田部藩領に属し、近代に入ると筑波郡小野川村となり、谷田部町と同じ筑波郡に属するなど谷田部町との関係が深い。

ところが、1960年代に始まる筑波研究学園都市

開発においては研究学園都市内の重要施設である国立公害研究所（現、独立行政法人国立環境研究所）や工業技術院関係機関（現、独立行政法人産業技術総合研究所）に隣接するなど研究学園都市にきわめて近接する立場となり、研究学園都市側一すなわち、谷田部町と正反対の方向一からの影響をきわめて受けやすい位置条件となった。研究学園都市建設が進捗する1970年代から1980年代にかけて、上原集落は旧来からの「谷田部」と成長する「研究学園都市」、さらには上位中心都市「土浦」とのはざまに、中心地と関わる生活行動が著しい変化を遂げたことが予想される。以上から、上原は「谷田部」と「研究学園都市」、さらには「土浦」という三方からの引力のバランスやその変化を検討するのにたいへん適した地域であると考えられ、本節における事例調査の対象としたものである。

上原は、旧谷田部藩領内の藩政村上原村であり、谷田部中心部の北東に位置する。明治22（1889）年、周辺の村と合併し筑波郡小野川村となった<sup>5)</sup>。昭和30（1955）年の合併で谷田部町となった。現在は昭和62（1987）年の合併によりつくば市となった。平成26（2014）年現在の上原集落には、158世帯、475人が暮らしている<sup>6)</sup>。

上原から谷田部までは自動車に乗れば15分ほどで行くことができる場所である。しかしこれは近年の話であり、昭和40年代や50年代は、人々は砂利の敷かれた道路をバスや自転車を利用して、長い時間をかけて行く場所であった。以下、本節では主として「自治会」、「土地利用・生業」、「神社」、「研究学園都市建設」に焦点をあて、上原の特色を記述する。

### a. 自治会

上原では、生活の話し合いや祭礼の運営等を行う組織を組合とよぶ。組合の長である区長を中心に上原の運営がなされている。

現在上原には60戸以上の家がある。しかし、組合に所属しているのは、古くから暮らしている36軒のみである。新しく上原地区に住むようになっ

た人は、組合に入らない。これは、古くから上原で暮らす人々と新しく上原に住み始めた人の間に「もめごと」を起こさないためである。上原には、祭・葬式・会合等において、昔からの方法が存在する。その方法は古くから住む人にとっては当たり前のことであるが、新居住者から不満が出るかもしれない。このようなことを懸念し、新居住者は組合に入れないことにしている。新しい家でも、36軒の中の分家は加入を許されている。しかし、分家は組合の大変さを知っているため、加入しない家も多いようである。

加入する家は変わらないが、組織の内実は変化している。その例として、区長の変化がある。かつては「羽織袴を着ているような人」と表現されるような、裕福な家の人々が務めていた役職である。しかし現在は、誰もが務めることができる役職となり、順番に回すようになっている。

#### b. 土地利用・生業

上原集落は、畑が広がる農村地帯である（第3図）。畑の仕切りを示すウツギがあまり見られない。道ばたには、羽黒山や馬頭観音の石碑がみられる（第4図）。

馬捨て場とよばれるへい獣を処分する土地がある（第5図）。これは、現在も死んだ犬や猫等を埋める場所となっている。

本章で扱う昭和40年代においては、農業に従事する人が大部分であったようである。理髪店等の

店はあったものの、日用品の買い物ができるような商店はなかった。そのため、近隣の集落に買い物に行くことになるが、これについては、第3節で詳述する。研究学園の建設により、大学等研究機関の職員や警備員などの職を得る人もあった。

#### c. 神社

上原地区には、稲荷神社がある（第6図）。上原地区に古くから住む36軒がこの神社の氏子になっている。

茨城県教育委員会<sup>7)</sup>によると、初午には住民が集まり、各自が作った弓矢で的を討ち、豊作を祈願する。また、二百十日には「あらよけ」という台風除けの祈願を行う。この時には、笛や太鼓の囃子が出る。

稲荷神社は、妻持稲荷と呼ばれていた時期があった。本来は妻持稲荷の名称ではなかったものを、ある人がこの名前を鳥居に飾ってから、妻持稲荷と呼ばれるようになったようである。しかし、東日本大震災によって崩れた鳥居を建て直した際、「稲荷神社」という名前に付け替えた。そのため、現在は稲荷神社となっている。

当社は神主のいない神社であるため、苜間の八坂神社から祭礼の日に神主を頼んでいた。しかし神主を頼むと3万円を払わなければならないため、近年は八坂神社に5千円を払い、赤いお札を迎えるだけにしている。



第3図 上原の畑地景観



第4図 上原の馬頭観音



第5図 上原の馬捨て場遠望



第6図 上原の稲荷神社

#### e. 研究学園都市建設

上原地区は、研究学園都市建設の際、土地の買い上げの対象になった地区の1つである。研究学園建設による土地の買収に対する反対が、現在のつくば市の各地で起こった。上原でも、住民の大部分を巻き込んで決起運動が行われた。この時、集落内で仕事をしている人を見つけると、区長が運動に参加するよう呼びにきたようである。住民の建設反対運動の様子は、新聞に取り上げられたこともあった。上原は土地の買い上げの対象となった地区の中で、最後まで抵抗した地域であった。

運動はあったものの、徐々に土地は売られていった。反対が激しかったこともあり、高値で売れた土地が多かったようである。土地を売った人の預金獲得のため、銀行員が上原へ毎日のように通っていた。これについては、第3節にて詳述する。

#### (3) 上原集落住民の買い物行動にみる谷田部 —昭和40年代を中心に—

本節では理容店を営むAさん（昭和12年生まれ・女性）の経験を中心に谷田部周辺の農村の買い物について報告する。Aさんは牛久で生まれ育ち、結婚するまで谷田部にきたことがなかった。初めて谷田部を訪れた時の感想をAさんは「牛久の方がにぎやかだったね。駅があったから」と

語った。II章2節で述べたように、上原には商店がなかったため、近隣集落の商店に定期的買い物に行っていた。店の側から販売に来ていたこともあったようである。

ここでは、Aさんが近隣集落の商店で、いつ何を購入していたのかを記述する。

#### a. 館野

上原に最も近い、商店のある集落である。Aさんが嫁いできた昭和40（1965）年頃、食料品や瀬戸物等の店があった。Aさんによると「必需品は大概手に入った」ようである。

「大塚」というガソリンスタンドがある。ガソリンスタンドを経営する夫婦の親世代までは酒屋を営んでいた。ここはガソリン以外にも燃料を販売していた。

佐藤洋物店は、Aさんがとても重宝していた店である。食料品をはじめとした様々な商品を扱っており、電話をして直接届けてもらうことも度々あった。理容店を営みながら大工である夫の住み込みの弟子の世話をしていたAさんにとって、なくてはならない存在であったようである。

理容店も何軒かあった。中には「T字のカミソリを持ってくればやってやる」というような人もいたようである。

## b. 榎戸

館野と同程度の距離にある集落である。Aさんがよく世話になっていたのは「ヨシさん魚」である。ヨシさんと呼ばれる男性が経営していた店で、妻が店で魚を売り、ヨシさんが軽トラックで魚を売り歩いていた。この軽トラックは、後ろが冷凍車両になっていた。「軽トラで魚を売りにきてね、『今日何にする?』って切ってくれたんだよ」とAさんは当時を振り返った。

## c. 谷田部

館野や榎戸で買うことが出来なかったものは、谷田部に買いに行った。上原から谷田部まではバスで行く必要があった。Aさんは家から自転車で館野のバス停に行き、谷田部行きのバスに乗った。この時乗って行った自転車は、先述した館野の大塚に預けていた。上原から館野へ行く道はアスファルト舗装がされておらず、砂利道を自転車でこいでいったことをAさんは懐かしそうに語った。

谷田部にはケーキ屋やタクシー、産婦人科、豆腐屋等、様々な店があった。

玉川堂という菓子店がある。ここは、現在も経営を続けている。Aさんの娘の七五三の祝いを行った際、来客に渡すための紅白の餅をこの店に頼んだ。

つくし堂という菓子店もあった。店頭で菓子を販売するだけでなく、配達も行っていた。Aさんは有線電話<sup>8)</sup>で注文し、家に届けてもらっていた。クリスマスには、ケーキの注文をとりきたこともあったようである。この店は、現在魚松という店になっている。

田丸屋という豆腐屋があった。業者や料理店で使われる程、味がよい評判の店であったようである。Aさん自身はあまり買いに行ったことはないようであるが、ミヨシという蕎麦屋が田丸屋で豆腐を購入すると、Aさんの家に置いていってくれていたようである。ミヨシは赤塚にあった蕎麦屋である。

上原周辺で一番近い美容院は谷田部にあった。

Aさんは理容店を営んでいるが、自分の髪は美容院で切っていた。

Aさんの営む理容店の待合室の椅子は谷田部の中村家具店で購入した。しかし、壊れてしまったため、新しい物はすぎわ文具店で購入した。すぎわ文具店はクレヨン等の文房具から本まで「何でも売っていた」文具店であった。すぎわ文具店はつくし堂同様、店頭販売のみではなく、自動車での販売も行っていた。Aさんは毎月『主婦の友』等の雑誌を届けてもらっていた。この雑誌の洋服を参考にしていたそうである。他に、町役場の近くにアキラという本屋があった。これは、後に庁舎が移転した時に閉店したようである。Aさんが谷田部警察署でオートバイの免許を取得した時、谷田部の本屋で試験の参考書を購入したそうである。

福屋という洋服屋があった。この店は、洋服以外にも、タオルケットや毛布、下着のセットのようなお祝いやお見舞いの贈答品も扱っていた。Aさんも、入院の見舞い・上棟式のお返し・七五三・嫁の顔見せの時等に配る物を購入した。瀬戸物を贈る時には、飯泉瀬戸物店で購入していた。

宴会や商談を行うような料亭が2軒あった。朝日屋と梅屋である。梅屋の歴史は古く、ここで七五三の祝いをした家もあったようである。梅屋では、Aさんの嫁いだ家の本家の父が商談をしたこともあった。飲み処としても機能しており、上原から自転車で飲みに行く人もいた。パチンコや映画館等の娯楽施設も多かったようであるが、これは次章にて詳述する。

## d. 土浦

上原から土浦までは、館野からバスに乗って行く。百貨店や洋品店、映画館等があり、谷田部よりも賑やかな街であったようである。Aさんは、昭和40~50年代の土浦について、「銀座みたいだった。歩くと人にぶつかるの」と語った。週末はいつも土浦に行き、子供が小さい時にはおぶって連れて行った。

土浦で購入していた物は、主に洋服である。小網屋や京成という百貨店があった。京成は若い人向けの店であったようで、Aさんはよく京成に行っていた。

大徳という女性洋品店があった。もとは呉服店であり、ブラウスやタイトスカートを仕立てていた。Aさんは大徳には頻繁に行っていたようで、「商品は高かったよ。あの頃はお金持ちだったから。仕立ててもらったタイトスカート1枚、結局とりに行かなかったな」と当時を振り返った。

土浦には銀行があり、研究学園建設の際には、土地を売った人の預金獲得のため、銀行員が上原をはじめとした農村へ毎日のように通っていた。榎戸から土浦の関東銀行に就職した人が上原の担当をしていた。この人物は毎日朝早くから夜遅くまで仕事をしてきたため、夕食をAさんの家で食べることが何度もあったそうである。

Aさんは週末になるといつも土浦に行っていたと語った。しかし、他の住民にとって上原から土浦に行くことは重要な買い物や用事をするためであるが多かった。Aさんが週末になると子供をおぶって土浦に行くことに対し、近所の人から「そんなにまでして土浦に行って。子供がかわいそうだ」と言われたことがあった。Aさんが土浦へ頻繁に通っていた理由として、次の2点があげられる。

1つめは、東京で暮らしていた経験である。Aさんは谷田部の印象について、「谷田部は寂しかった」と語った。一方土浦に対しては「銀座みたいだった」と語るように、東京にいたころを思い出させる場所であったようである。

2つめは、理容店を営んでいたことによる安定した現金収入である。農家の人々が作物を収穫し、それを売る時にまとまった収入を得るのに対し、理容店を営むAさんは、客が来ることで現金が入る。そのため、定期的に安定した収入を得ることができたのである。「床屋なんだからジョーゼットのブラウスでも着ればいいのに」と言う人もいたことから、Aさんは上原における「お金持ち」として見られていたことがうかがえ

る。これらの理由から、Aさんにとっての土浦は楽しみを得る場所であった様子がうかがえる。

#### e. 東京

上原で生活している中で、東京に行くことはほとんどなかった。しかし、Aさんの半生において、東京は重要な役割を果たしている。Aさんは高校卒業後、東京の中野で理容師の修業をした。そして神田の専修大学で理容学校の入学試験を受け、都内の理容学校に1年通った。その後、上原に嫁ぐまで東京で理容師として働いており、夫と見合いをする時も、東京から常磐線で土浦にきた。

昭和40(1965)年12月18日に結婚したAさんは、その年の12月25日に理容店を開業している。理容店を開業するにあたり、店で使用する道具を浅草で買いそろえた。浅草に行くには、バスと列車を使った。館野まで行き土浦行のバスに乗った。土浦から列車に乗り、浅草へ行った。浅草で購入した物は、自分で持ち帰ることができなかったため、着払いで上原まで送ってもらった。

### (4) 冠婚葬祭・医療行動にみる上原集落住民と谷田部

本節では、谷田部周辺農村の冠婚葬祭・医療行動を取り上げる。特に注目するのは、結婚式・七五三・葬式、医療受療としては産婦人科である。これらの機会に、どのように谷田部を利用していたのか、また、その変化について記述する。

なお、これは第3節同様、上原集落に住むAさんの語りにもとづいた記述である。

#### a. 結婚式

Aさんは、昭和40(1965)年上原に嫁入りした。土浦にあった百貨店である小網屋のレストランで夫と見合いをした。この時、榎戸で理容店を営む仲人も同席していた。

結婚が決まると、箆箆や婚礼衣装等の嫁入り道具を土浦で購入した。

結婚式は、上原にある夫の実家で行った。夫は次男で、分家をしていた。嫁入りの支度を牛久で

済ませ、夫の弟の自動車で牛久から上原にきた。夫の実家の8畳2間を利用し、祝宴が行われた。

お見合いの場や嫁入り道具の購入の場として、土浦が機能していたことがわかる。ここから、土浦は、人生の中で大きな買い物をする場所としての中心性を持っていたと考えられる。

Aさん夫婦が上原の家で結婚式を行った最後の夫婦であったようである。Aさんの義理の妹は近隣の鰻屋で式を挙げた。

昭和50年代に、谷田部の農協で開かれた結婚式に呼ばれたこともあったそうである。農協は3階建ての建物で、その3階で式が行われた。

土浦の観光ホテルで式を挙げた人もいた。土浦市史編さん委員会<sup>9)</sup>によると、昭和30年代後半には結婚式を家ではなく料亭やホテルで行うことが主流となりつつあるという記述がある。ここから、この時期には上原周辺の広い地域で結婚式の場が自宅から料亭・ホテルへと移行していったことがうかがえる。

式を挙げる場所の変化に伴い、招待する人にも変化が見られる。家で行っていた頃は、集落到に住む人全てが招待され、式の手伝いも集落の人が行った。しかし、上原以外の場所で行われるようになるにつれ、集落到に住む人々が招待されることは少なくなり、夫婦の親戚・知り合いのみを招待し、手伝いを頼むことが少なくなっていった。

#### b. 産婦人科

Aさんは昭和42(1967)年に第一子を出産している。Aさんが出産した昭和40年代は、産婦人科で出産する人よりも自宅を出産するの方が多かったようである。しかしAさんは、谷田部の庄司産婦人科で出産している。

庄司医院(産婦人科)へは、上原からバスで通っていた。館野まで自転車で行き、そのバス停から谷田部行きのバスに乗るまでは買い物の際と同じであるが、谷田部中心部の十字路でバスを「牛久行」に乗り換える。

出産以外にも、急病等で庄司医院に行くことがあった。このような時には自動車で行った。Aさ

んの家で自動車を持つまでは、Aさんの夫の弟に自動車で送ってもらった。

#### c. 七五三

上原やその周辺では7歳の祝いをオビトキと呼び、長子の時には特に盛大に祝った。オビトキ祝いを盛大に行う地域は、茨城県・埼玉県・千葉県に広く分布している。特に、各県の利根川流域では、「結婚式のような」と表現される程盛大なオビトキ祝いが数多く報告されている。谷田部町周辺においても、オビトキ祝いが盛大に行われていたことが記されている。特に第一子の場合は盛大に行われていたようである<sup>10)</sup>。Aさんはオビトキの語を用いず、「七五三」と称したため、本報告ではオビトキ祝いを七五三と記述する。

Aさんの娘が七五三の祝いを行ったのは、7歳になった昭和49(1974)年である。祝いは家で行った。家で祝いをを行う際には、沢山の人の協力があった。

七五三の祝いで、女の子は晴れ着を着る。この晴れ着は土浦の大徳で購入し、当日はAさんが着付けを行った。

Aさんの家の前にビニールシートをはり、テーブルを並べて会場を作った。集落中の人がかかるため、家の中ではおさまりきれないためである。テーブルは館野にある佐藤洋物店が持ってきた。

料理は榎戸の「ヨシさん魚」という魚屋が指揮をとった。Aさんの家だけではまかないきれなかったため、Aさんの姉などの親戚が手伝いにきてくれた。出した料理は、魚料理・ソバ・おしるこ等である。ソバは佐藤洋物店が持ってきた。おしるこは七五三の祝いに必ず出さなければならないものであった。人数分の皿・魚の調達はヨシさん魚が行った。

祝いに来た人には、紅白の餅を土産として持たせた。この餅は、谷田部の玉川堂に頼んだ。集落中の人々が祝いにくるため、頼む餅の量が膨大になる。「七五三は餅代がかかるから、結婚式より大変だよ」とAさんは語った。

このように、長子の七五三の祝いには、多くの

人が関わり、出費も大きかったことがうかがえる。「(七五三は) 1人目をやればいいから、2人目はやらないよ。長男・次女はやらない」と語るように、長女以外は内祝いで済ませた。次女の時には振り袖ではなく、祖父母が土浦でドレスを購入してくれたという。

Aさんの長女のように、家で七五三の祝いをした時代はその後何年か続いたようである。自宅以外で行われた七五三にAさんが初めて出席したのは、昭和60(1985)年頃であった。これは、谷田部の料亭で行われた親戚の子供の七五三の祝いであった。

いつ頃から家で七五三の祝い行われなくなったのか、正確な年代は不明である。これは、招待客の変化によるものと考えられる。場所の変化に伴い、招待客の範囲にも変化が見られる。自宅で行っていた頃は、集落中の人々が招待され、手伝いを行うことが多かった。しかし、儀礼の場所が自宅から離れるにつれ、当家とその親戚だけで済ますことが多くなった。そのため、集落中の人を招待するという事は少なくなっていったことが推察される。

#### d. 葬儀

上原の家<sup>11)</sup>は、全て館野にある金剛院の檀家である。墓地は上原内に点在している。

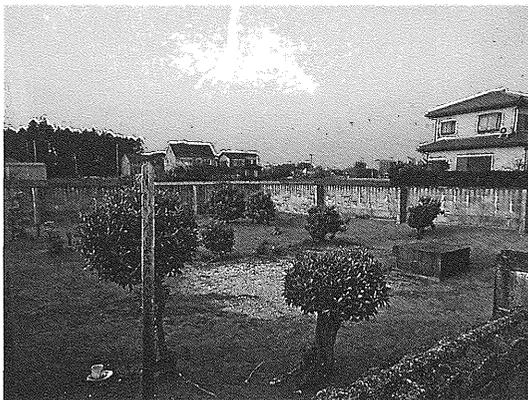
上原の墓地は両墓制である。両墓制とは遺体を埋める埋め墓(第7図)と、盆や命日等の機会に

行く詣り墓(第8図)というように、墓が2か所にわかれている墓制を指す。詣り墓には石塔がたてられているが、埋め墓に石塔はたてられていない。上原の両墓制については、研究学園都市建設の際に行われた茨城県教育委員会編<sup>12)</sup>に報告がある。

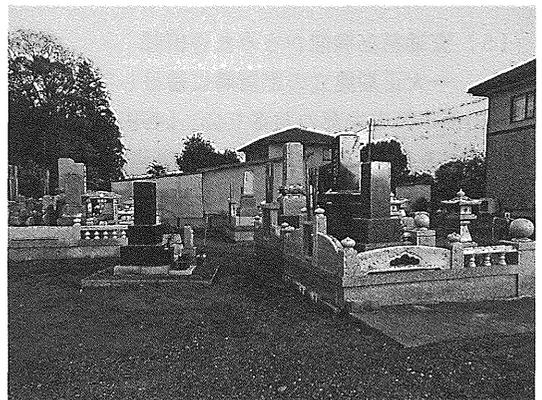
Aさんによると、個人墓地は昔から上原に住んでいる人や資産家のものであるようである。共同墓地もあり、個人墓地を持たない人はそこに墓を持つ。

ここでは、葬儀の変化として、行う場・手伝いに来る人等の変化を記す。自宅で葬儀を行う際には、葬式組が手伝いに来る。葬式組は、近所の10~11軒で組んでおり、1軒につき2人手伝いに行くことになっていた。女性は料理を担当した。葬式には小豆を入れた赤飯を出す。葬式で出す赤飯は塩で味付けを行うため、ゴマを入れない。一方、祝儀の場合は塩で味付けをせず、ゴマをつけることになっている。

死者を送り出す前に、本膳と呼ばれる食事を出席者全員で食べる。これは、高膳<sup>13)</sup>で食べることになっている。Aさんによると、「おいしくないもの」であったようである。本膳を食べる順番は、親戚から上原の人の順番であった。ここで使われる高膳は、足がついた黒くしっかりとした膳で、上原の共有財産であった。使用した物は、ピカピカに磨いてから戻さなければならなかったため、片付けが大変であったようである。料理を担当す



第7図 上原の埋め墓



第8図 上原の詣り墓

る女性達は、最後の人が食べ終わるまで待つてから洗い物を行うため、洗い終わる時間が遅くなった。

料理を作る女性達の中には年齢差があったため、若い嫁は仕事を回されることが多く、その時の苦勞が語られた。例えば、白米を炊く釜を洗うのは、若い嫁の役目であった。その時の様子を、Aさんは次のように語った。

「年上の人たちから、『オラ達は十分やったから、おまえらやれ』って言われた。白い割烹着を着てったけど、(釜を)洗うと真っ黒になった。黒くなった釜をピカピカになるまで磨いたから。』

自宅葬では、経験を積んだ人が指揮をとった。Aさんは、これまでに2回ほど指揮をとったことがあったそうである。

栗原の斎場や榎戸の斎場ができてからは、自宅葬が段々と減っていった。斎場で行うようになってからは、親戚の葬儀でない限り、手伝いに行くことはなくなったという。親戚の場合は夫婦2人で手伝いに行く。

Aさんによると、土浦で葬儀を行うことが多かったそうである。土浦の高架道の脇に、斎場が2軒と火葬場が1つあった。土浦以外に、榎戸や栗原等の農協で行うことがあった。土浦には市営の斎場があり、農協の場合は、業者に委託していた。水海道や龍ヶ崎で葬儀を行うこともあった。

## (5) 交通結節機能からみた谷田部

### 一大正期建立の獣霊碑に着目して一

谷田部市街中央部の西寄りに、「谷田部四ツ角」とよばれる交差点がある。この交差点は土浦―谷田部―岩井方面を結ぶ国道354号線の旧道と旧谷田部陣屋―藤代方面を結ぶ幹線道路が交差し、谷田部(町)の道路元標(第9図)が建てられている谷田部市街における重要交差点である。

この四ツ角からわずかに20メートルほど北に寄った地点に、道路に面して大正13(1924)年に建立された獣霊碑(第10図)がある。この獣霊碑

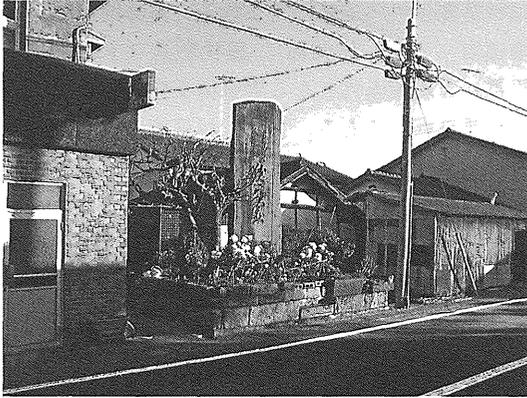
は、碑自体の高さが約3メートルある大型の石碑であるが、それが高さ約40センチメートルの台座とともに高さが1メートル以上ある石囲いの塚の上に建造されており、谷田部市街のいわば「一等地」に存在することとその巨大さで、谷田部市街の重要なランドマークになっている。

石碑の表側には中央に大きく「獣霊」と刻まれており、その裏側には「大正十三年七月二十二日建立」という建立年月日と、建立に協賛した多数の寄付者名・寄付金額等が刻まれている。寄付者に関する詳細は後述するが、寄付者の肩書には「谷田部署轄内牛馬商」、「谷田部町牛馬車営業組合」などの名称が見受けられ、また、小野川村をはじめとする農村部住民からの寄付も存在する。このことから、この獣霊碑が対象とする「獣」とは主として牛馬で、荷物の運搬や荷車の曳行(第11図)<sup>14)</sup>に寄与し命を落とした多数の牛馬の供養塔であることがわかる。すなわち、巨大な馬頭観音という意味合いをもった石碑である。

別の言い方をすれば、この獣霊碑はかつて荷物輸送の主役が牛馬であった時代における谷田部市街の活況と、この活況に関わる人々の牛馬への哀悼の念が刻まれた、まことに貴重な情報とみることができる。数えてみると、谷田部町内から156名、谷田部町外の16を超える村々等から461名の人々がこの供養塔建立のために寄付をしている。谷田部町内の156名は、何らかのかたちで駄馬をはじめとする牛馬と関わる人々であろう。また、



第9図 谷田部町道路元標

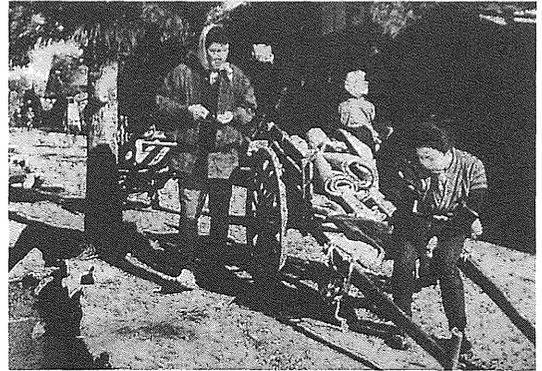


第10図 谷田部四ツ角付近にある獣霊碑

谷田部町外の村々に居住してこの供養塔建立に賛同した人々は、居住する村落から谷田部市街へ駄馬や牛馬が曳行する荷車で荷物運搬に何らかのかたちで関わった可能性がある。

つまり、この供養塔建立のための寄付者情報は、輸送手段としての牛馬を介して、谷田部市街とその周囲に存立する後背地域との結節構造を示す好資料と考えることができる。谷田部に獣霊碑が建立された大正13年は、関東大震災の翌年であると同時に、土浦から谷田部を経由して水海道に至る「常南電気鉄道」<sup>15)</sup>の予定線が着工された翌年でもある。常南電気鉄道の建設は結果的には実現しなかったが、大正13年当時には新しい鉄道の建設に向けて谷田部地域が熱気を帯びていた可能性がある。そこで、本節ではこの獣霊碑建立寄付者情報を整理し、大正期谷田部における牛馬を介した交易の様相から、当該期谷田部における結節構造の特質を検討する。

なお、谷田部を含む茨城県南地域には、民俗宗教として十九夜信仰が分布する。十九夜信仰においては獣霊として「犬」を供養し、沿道の辻に供養塔を建立する習俗があるが、同信仰においては供養塔の建立が女人講によって行われる習俗であり、谷田部の獣霊碑建立寄付者の大半は男性名であることから、谷田部の獣霊碑は犬を対象とした十九夜信仰にもとづく供養塔ではないと判断した。



第11図 昭和30年代の荷車  
—谷田部婦人部制作映画より— 出典：14) 9頁

さて、居住地別かつ寄付金額別にみた寄付者の全体は第1表のように整理される。ただし、碑文には寄付金額3円の人々よりも下段に、金額が記載されていない人々の氏名等も地域ごとに列挙されている。本稿では碑文の記載状況からみて、これらの人々は「3円未満の寄付者」であろうと推定した。

寄付金額が多額となる例では15円が2名あり、いずれも谷田部町内の人々である。金額はそのあと10円、8円、7円と続き、キリの良い5円寄付者は125名と多い。また、寄付金額明示の下限となる3円寄付者は135名で、さらに多い。しかし、金額の「記載なし」が313名でいっそう多数となることから、寄付金額3円はかなり高額を意味するものと推定される。

地域別にみると、寄付者は石碑建立の場である谷田部町内がもっとも多い。その谷田部町では、町内の一般住民のほか、牛馬商32名、牛馬車営業組合から3名の寄付者がある。牛馬商の中には「桜井利三郎」「桜井義一」など同姓者が並んで記されている場合があり、1軒から複数名の寄付者があった場合も想定されるが、大多数は異なる姓であり、多数の牛馬商が存在したとみられる。いっぽう、牛馬車営業組合からの寄付者3名は、「組合長 町井才司、副組合長 小川茂十郎、同大久保新三郎」とあり、牛馬車営業の関係者が組合長のみならず、副組合長を2名置く組合組織を

形成していたことが判明する。なお、牛馬車営業組合からの寄付者は3名とも寄付金額の記載はなく、組合長と副組合長以外からの寄付は記されていない。

このほか谷田部町内からの寄付者として、谷田部町料理店として11名、谷田部町芸妓営業として1名の名前がある。料理店11名には同姓並列記載者2名が含まれるが、この同姓者を1軒として数えても合計10軒の料理店が存在したことになる。この数からは、谷田部町のかなりのにぎわいを想定してよいであろう。さらに、芸妓営業の存在があり、この時期の谷田部町の繁栄は、牛馬が曳行する荷車や駄馬が多数通行し、町には料理店が多数並ぶ姿があったとみることができる。

この荷車や駄馬による交通流は、谷田部市街を取り巻く農村地域との交易の中で発生する。そこで、つぎに谷田部町以外の地域からの寄付についてみていく。寄付者全体の構成では、小野川村をはじめとする16の村々からの寄付が圧倒的に多い。獣霊碑建立寄付者（機関を含む延べ数）全617名のうち、457名が谷田部町外の村々に居住する人々である。これは比率にして約74パーセントであり、獣霊碑建立寄付者を指標にすると、谷田部町の繁栄のかなりの部分を同町周辺の村々が支えていたとみることができる。

この村名を具体的にみると、寄付者が最も多いのは小野川村で、同村は旧谷田部領内であるとともに筑波郡内に位置する。次いで、寄付者が多い葛城村は旧谷田部領内、筑波郡内である。ところが、続く十和村は旧谷田部領外となるが筑波郡内である。このようにみていくと、上郷村（領外、郡内）・真瀬村（領外、郡内）・島名村（領外、郡内）・福岡村（領外、郡内）・板橋村（領外、郡内）・久賀村（領外、郡内）・小張村（領外、郡内）・谷井田村（領外、郡内）・豊村（領外、郡内）・三島村（領外、郡内）・長崎村（領外、郡内）・鹿島村（領外、郡内）・大生村（領外、郡外）となっており、村落部における寄付者の分布は旧谷田部領をかなり越えているが、おおよそ筑波郡内に収まることわかる。ただし、谷田部町以外の寄付者に

は村落部以外の地名が含まれる。具体的には、水海道町（2名、結城郡）、藤代駅前（1名、北相馬郡）と茨城県外となる東京南千住（1名、東京府北豊島郡）である。また、村落部のうち、大生村は結城郡である。いっぽう、同じ筑波郡であっても、筑波町や北条町、高道祖村など北部の町村からの寄付者名はみられない。以上から、獣霊碑建立寄付者の分布は、つぎの特徴を持つと指摘できる。

①旧谷田部領であった村からの寄付者は多いが、寄付者全体の分布からみると、旧谷田部領を大幅に越えた領域から寄付が集まっている。

②寄付者の大半は筑波郡内の居住者である。しかし、寄付者は筑波郡全域に分布することはなく、主として筑波郡の南部、すなわち谷田部市街の南西方向に偏在するとともに、筑波郡を越えた地域からの寄付が存在する。

③筑波郡を越えた寄付は水海道・藤代・東京方面で、谷田部から見て西方および南方に偏って分布する。

④土浦町など、東方あるいは新治郡方面からの寄付者はみられない。

このように、大正期における谷田部町は牛馬による交通の重要な結節点としての機能を持っていたと考えることができる。また、この時期に谷田部町を通して形成された交易圏は、南西方向に主要な広がりを持つことが指摘できる。

谷田部町の結節構造の検討資料は上記獣霊碑建立のみにとどまるものではなく、今後多方面からの分析が必要であるが、上記獣霊碑建立寄付者資料はその重要な一側面を示す資料として有益である。

## （6）農村部からみた谷田部の中心性

第Ⅱ章では、谷田部周辺農村の1つである上原を中心に、諸活動における谷田部とのつながりを述べてきた。本節では、これまでの各節の事例から、周辺農村部からみた谷田部の中心性を考察する。

第1表 大正期建立谷田部獣霊碑寄付者の居住地

居住地、所在地または組織		寄付金額別の寄付者数（人）									計
		15円	10円	8円	7円	6円	5円	4円	3円	記載なし	
谷田部町内	谷田部町	1	2	1	1	2	17	3	27	55	109
	谷田部署轄内牛馬商	1	9	-	-	-	10	-	12	-	32
	谷田部町料理店	-	-	-	-	-	5	1	5	-	11
	谷田部町牛馬車営業組合	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3
	谷田部町芸妓営業	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
谷田部町以外の地域	小野川村	-	3	-	-	-	19	-	-	48	70
	葛城村	-	2	-	-	-	28	-	6	29	65
	十和村	-	-	-	1	-	15	-	25	15	56
	上郷村	-	-	-	-	-	3	-	14	33	50
	真瀬村	-	-	-	-	-	4	1	9	27	41
	島名村	-	1	-	-	2	6	3	7	21	40
	福岡村	-	1	1	1	1	7	5	7	14	37
	板橋村	-	-	-	-	-	2	-	3	13	18
	久賀村	-	-	-	-	-	2	-	2	12	16
	小張村	-	-	-	-	-	1	-	1	12	14
	谷井田村	-	-	-	-	-	-	-	7	5	12
	豊村	-	-	-	-	-	-	-	2	8	10
	三島村	-	-	-	-	-	-	-	1	9	10
	長崎村	-	-	-	-	-	-	-	-	9	9
	鹿島村	-	-	-	-	-	4	-	3	-	7
	水海道町	-	-	-	-	-	1	-	1	-	2
	大生村	-	-	-	-	-	1	-	1	-	2
	東京南千住	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
	藤代駅前	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
計		2	19	2	3	5	125	13	135	313	617

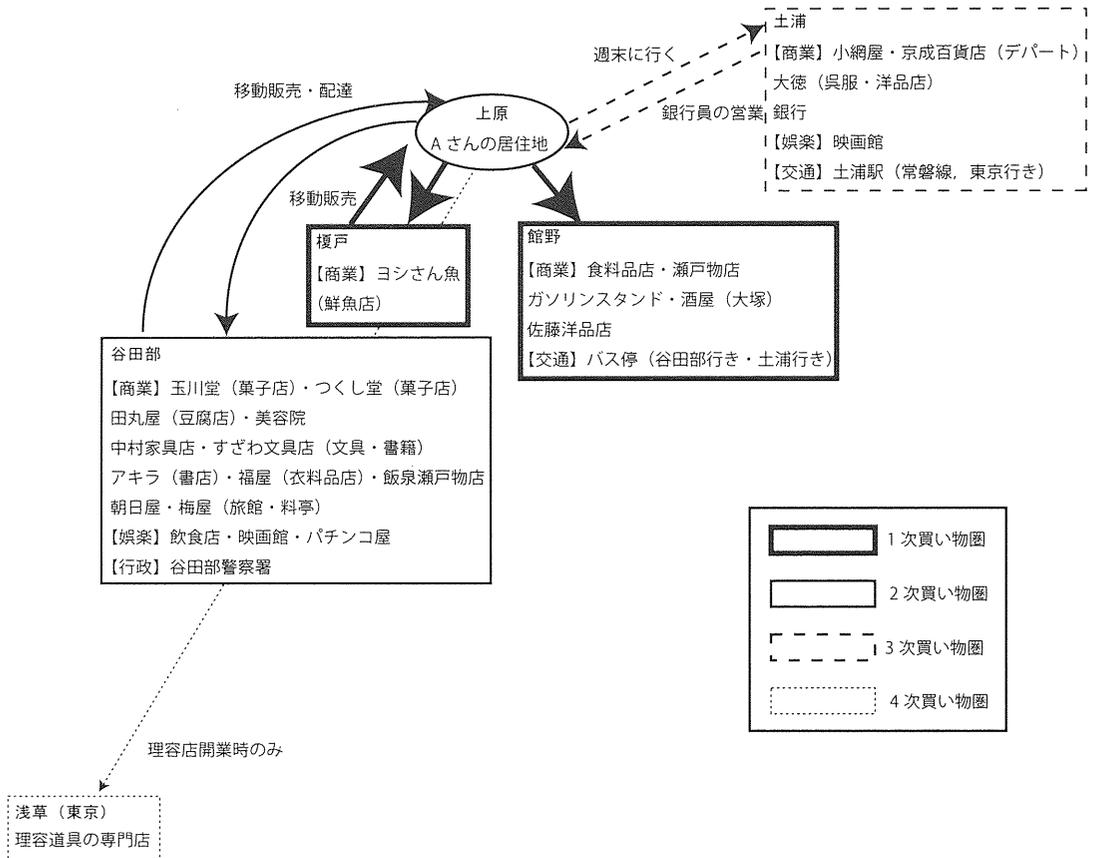
(現地調査による)

注) 寄付金額「記載なし」は、3円未満の寄付と推察される。

第3節では、理容店を営むAさんを例として、買い物を行う範囲を記述した。Aさんの買い物行動をみると、谷田部は日常的な買い物よりも、少し足を延ばして行く場所として認識されることが推察される(第12図)。Aさんは日常的な買物を館野や榎戸といった自転車で行ける範囲で済ませている。しかし、長女の七五三の祝で用いた餅や嫁入り道具・祝儀・不祝儀のお返しの品等は谷田部や土浦で購入している。このことから、谷田部で購入した物は、日用品よりも上等な品であっ

たといえよう。

交通手段としては、バスが重要な役割を果たしていた。上原からAさんの実家がある牛久に行くためには、3本のバスを乗りつぐ必要があった。谷田部・土浦に行く際には、バス停のある館野まで自転車で行き、近くの店に自転車を預けてバスに乗っていた。バスが通ったことにより、土浦へのアクセスが便利になり、Aさんのように毎週末行くことも可能になった。しかしバスが通る以前は、土浦は本当に大きな買い物の時だけに行



第12図 上原に居住するAさんの買い物範囲  
(現地調査による)

く場所であり、谷田部で買い物を行うことが多かった可能性が高い。

買い手が店に行くだけでなく、配達・出張という形で、売り手の方から出向いてくることも多かった。Aさんは理容店を営む他に、主婦として大工である夫の弟子の分の食事を作らなければならなかったため、買い物に行く時間は限られていた。そのため、館野・榎戸から上原まで配達してくれる店を頻繁に利用していたことが語られた。具体的には、館野の「佐藤洋物店」・榎戸の「ヨシさん魚」・谷田部の「つくし堂」・「すざわ文具店」である。これらの店の存在は、近くに商店がなく、買い物に不便な地域に住む人々の生活にとって重要な役割を果たしていたことがうかがえる。

第4節では、第3節同様Aさんを例として、人生儀礼の場の移りかわりの記述を行った。人生儀礼の場が、自宅から外部へ移行する際にも、谷田部の中心性がうかがえる。本稿では、結婚式・葬儀・七五三・出産を例として挙げた。それぞれの行われる場所が自宅から外部へ移行していくのには時間差が見られる（第13図）。

結婚式と出産は、昭和40年代は大きな過渡期にあった。一方、七五三・葬式はそれに遅れる形で場所が移っている。葬式は、近隣に斎場が建てられても、近年までは自宅で行うことが多かったようである。

場所が自宅から料亭やホテル、斎場等へ移行するにあたり、まず移る場所は谷田部であった。結婚式は谷田部の農協、出産は谷田部の庄司医院、

七五三は谷田部の料亭で行われている。谷田部で行われていたのは一定期間のみで、その後は土浦やその他へと場所が移っていく。これは、土浦よりも谷田部の中心性が低いためであったと推察される。買い物を行う場合には、重要な物ほど土浦や東京といった中心性の高い場所で購入する傾向がみられた。人生儀礼においては、購入する場所が移るのと同様の段階で、行われる場所が移っていったのではないかと考えられる。

第5節では、谷田部に建てられた獣霊碑から谷田部の交通結節機能をみた。獣霊碑建立の寄付者は、旧谷田部藩領、筑波郡を中心として、谷田部の西方および南方に偏って分布することが指摘された。しかし、土浦町など谷田部の東方、新治郡方面からの寄付者はみられない。このことから、谷田部は筑波郡南方の交通の要所であったことが確認される。

第II章において確認してきた事例から、谷田部は上原のような周辺農村、そして、筑波郡南部の中心地であったことがうかがえる。

今回注目した機能以外にも、谷田部の持つ中心性を考察するものは多々存在するのではないか。今後、様々な方面から周辺の農村における谷田部の中心性を考察することが必要であると考えられる。

(年)	結婚式	出産	七五三	葬式
昭和20	自宅 (上原)	自宅 (上原)	自宅 (上原)	自宅 (上原)
昭和30				
昭和40	農協 (谷田部)			
昭和50	料亭 ホテル 式場 (土浦・ その他)	病院 (谷田部) その他		
昭和60			料亭 (谷田部)	斎場 (土浦・ 栗原)
平成			その他	

第13図 人生儀礼の場の推移 (Aさんの語りをもとに筆者作成)

### Ⅲ. 谷田部市街の実像

#### (1) 谷田部市街の景観と地籍

本節では、旧谷田部町の中心商業地域である谷田部市街について、その景観を概観する。谷田部市街は谷田川を挟んで東側の台町と西側の内町から成り、河川周辺の低地から東西の台地に向かって緩やかな傾斜が続いている。北には国道354号線、東には県道143号線、西には県道3号線が走り、市街を東西に貫く道路に沿って商業機能が集積している(第14図)。かつて陣屋が置かれていた(第16図)谷田部小学校付近には、文具店など若干の商店が存在するが、それらの位置は中心商店街から隔たっており旧陣屋近辺には商業機能の集中はみられない。

第15図を見ると、道路が中央部でクランクになっていること、また道路に面して間口が狭く奥行き長い地割が並んでいることがわかるが、これらはいずれも谷田部が陣屋町であった時代の名残である。天明期作成の「分間谷田部絵図」では、内町の東部に本道をほぼ直角に曲げた遠見遮断の存在が確認できる(第17図)。近世の遠見遮断は自動車通行の普及にともない、各地で曲がる角度を緩やかにするなど道路改変が施される例が多くみられるが、谷田部では旧来の角度がほぼ残存するクランクとなっている。交通量は多く、牛久駅行、水海道駅行、みどりの駅行のバスが運行している。道路の複雑な形状と交通量の多さ、歩道の狭さから、歩行者が安心して通行することは困難



第14図 谷田部市街の景観

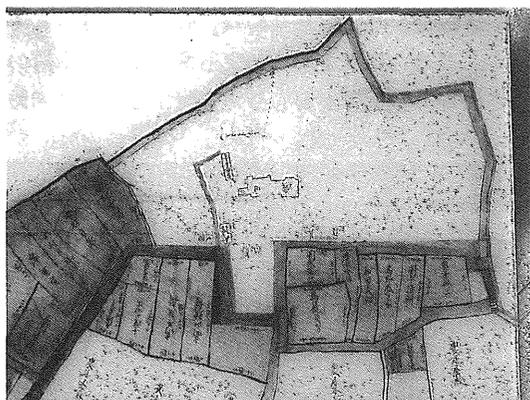
な状況にあるといえる（第18図）。

昭和50（1975）年時点で谷田部市街には92軒もの商店が立地しており，昭和62（1987）年のつくば市発足時には内町につくば市役所本庁舎が置かれた。しかしその後谷田部市街の商業機能は急速に低下し，平成22（2010）年には市役所本庁舎が

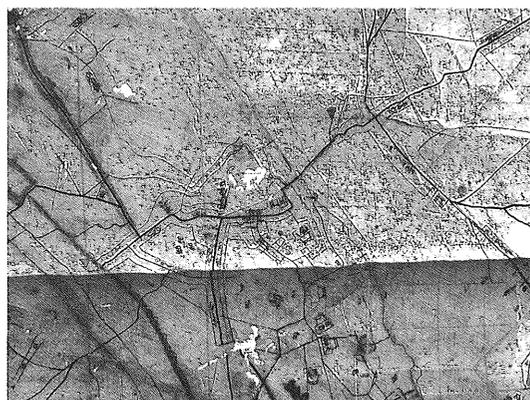
研究学園へと移転した。平成26（2014）年現在の商店数は33軒で，廃業しシャッターを降ろした元商店が軒を連ねる，いわゆる「シャッター街」の様相を呈している。空き地や空き家も多く，平日の昼間であっても買い物客の姿はほとんど見られない。地域振興策としては，平成16（2004）年か



第15図 谷田部市街の地籍（2013年地番図より作成）



第16図 絵図にみる谷田部陣屋とその周辺  
「官地官舎貫属邸地絵図（明治6年）」  
（秦 正良氏原図所蔵，谷田部郷土資料館撮影図所蔵）



第17図 天明期における内町東部の遠見遮断  
「分間谷田部絵図」(飯塚護家所蔵)

ら千歳通りにおいてクリスマスイルミネーションが行われているほか、平成24（2012）年、平成25（2013）年にはつくば市の「アイラブつくば・まちづくり補助金」を受けた「谷田部伊賀七音楽祭」

が開催されている。また、平成21（2009）年に谷田部の商店経営者によって「谷田部タウンネット」が組織され、「地域の暮らしを支える場としての商店街」をキャッチフレーズに、市と協力しながら商店街の再活性化を目指している<sup>16)</sup>。

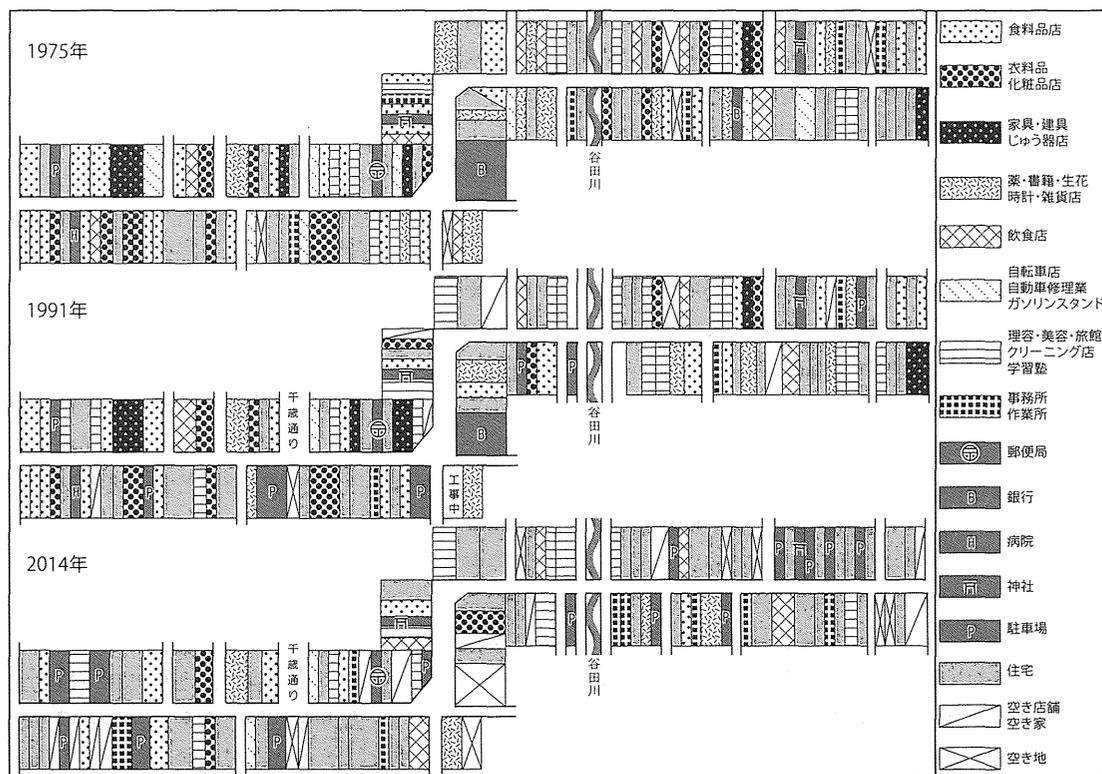


第18図 谷田部市街のクランク

## （2）商業機能の実像と推移

### 一昭和最後期・平成期との比較一

第19図は、昭和50（1975）年、平成3（1991）年、平成26（2014）年の3時点における谷田部市街の土地利用をあらわしたものである。商店を「食品店」「衣料品・化粧品店」「家具・建具・じゅう器店」「薬・書籍・生花・時計・雑貨店」「飲食店」「銀行・病院」「自動車修理業・自転車店・ガソリンスタンド」「理容室・美容室・クリーニング店・学習塾」に区分し、また商店以外の土地利用



第19図 谷田部市街における土地利用の変化  
 （現地調査および『1975年谷田部町「中央商店街」診断報告書』、高橋ほか（1992）により作成）

を「事務所・作業所」「駐車場」「空き店舗・空き家」「空き地」「住宅」に区分して示した。以下では、これらについて、それぞれ昭和50年から平成26年までにどのような変化があったのかを記述していく。

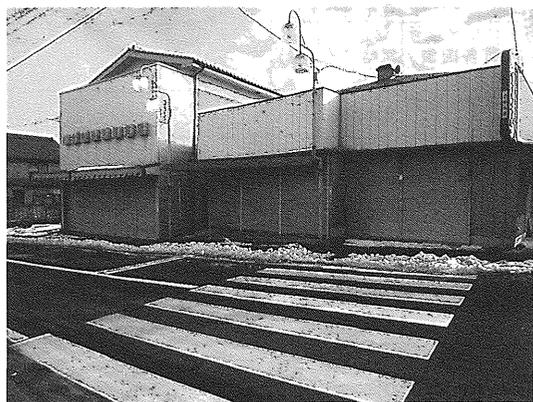
まず、食料品店は、昭和50年には27軒あったが、平成3年に22軒となり、平成25年には8軒まで減少した。現在営業しているのは、豆腐店、醤油・味噌店、各種食料品店、酒店2軒、和菓子店3軒である。醤油・味噌店と酒店はインターネットを利用した商品の販売および全国への配送サービスを行っている<sup>17)</sup>。また、和菓子店のうち1軒はつくば市やつくばみらい市に複数の支店を持っており、1軒はゴルフ場などに土産物としてまんじゅうを卸している<sup>18)</sup>。衣料品および化粧品店も、昭和50年には14軒あったものが平成3年には10軒、平成26年には3軒と減少している。家具・建具・じゅう器店は、昭和50年から平成3年にかけては増減が無く、6軒が営業を行っていたが、平成26年までには全て閉店した。薬・書籍・生花・時計・雑貨店は、昭和50年の11軒から平成3年の8軒、平成26年の4軒と減少した。これらのうち現在営業しているのは薬局、生花店、時計・眼鏡店、スポーツ用品店であり、スポーツ用品店はつくば市、土浦市およびつくばみらい市の小中学校指定の体操服や学生服、上履きなども取り扱っている<sup>19)</sup>。以上のことから、昭和50年には多くの小売業を行う商店が存在していたが、その後大幅に減少し、現在では卸売や支店経営、インターネット利用など谷田部での店頭小売に頼らない経営形態の商店を中心にごく少数が存続しているといえる。なお、昭和50年以降の小売店減少には、周辺地域において大型スーパーやコンビニエンスストアが開業したことも大きくかかわっていると考えられる。昭和50年の「谷田部町『中央商店街』診断報告書」では、谷田部市街周辺に大型スーパーが出店することで「食料品及び日用雑貨については特に競合関係が激しくなる」ことが指摘され<sup>20)</sup>、各商店は「接客サービスの向上」や「閉店時間の延長」、「『研究学園地区』への外商」等を

積極的に行うべきであると述べられている。

飲食店は昭和50年に10軒あったものが平成3年までに4軒まで減少したが、平成26年には微増し5軒となった。現在営業している飲食店の内訳は中華料理店が2軒、居酒屋・スナックが3軒である。第19図の中央、道路がクランクになっている部分の西側に神社が存在するが、この周辺にはかつて料理屋が集積していた。現在は居酒屋・スナック等が集積しており、歓楽街としての機能がわずかではあるが残存している。また、平成3年から平成26年までの間に新たに専用駐車場を設置した飲食店が存在するが、これは隣接する商店が撤退し空き地となったところを利用したものであると考えられる。平成3年から平成26年までの間に病院は廃業し、常陽銀行谷田部支店は国道354号線沿いへと移転した。自動車修理業・自転車店・ガソリンスタンドは、昭和50年には8軒あったが、平成3年に1軒まで減少し、平成26年現在は自動車修理業とガソリンスタンドの2軒が営業している。自動車修理業は、昭和50年時点では自転車小売業と併せて経営を行っていたが、現在は自転車店は空き店舗となっている。ガソリンスタンドの存続要因としては、交通量が多い道路に面していることが関係していると推察される。理容室・美容室・旅館・クリーニング店・学習塾は、昭和50年には13軒であったが平成3年までに5軒増加して18軒となり、その後減少したものの、平成26年現在でも11軒が存続している。昭和50年から平成3年にかけて増加したのはこの業種のみであり、現在の谷田部市街において最も多い業種となっている。現在営業している商店の内訳は理容室・美容室6軒、クリーニング店4軒、学習塾1軒である。理容室・美容室は、古くからの固定客の存在が経営を支えていることが推察される。クリーニング店の中には店名の書かれた専用自動車を所有している商店もあり、遠方からの回収や配達サービスを行っているものと考えられる。以上のことからサービス業は、昭和50年から考えると大幅に減少してはいるものの、小売業など他の商店と比較するとその減少率は低く、現在の谷田部

市街の商業構成において重要な位置を占めているといえる。また、商店経営者の高齢化と後継者不足については1970年代半ばの時点で既に指摘されており（高橋伸夫ほか<sup>21)</sup>、現在においても深刻な問題となっていることが予想される。

商店以外の土地利用としては、事務所・作業所が挙げられる。これは昭和50年には6軒であったものが平成3年に3軒まで減少、その後平成26年までに8軒へと急増した。現在存在する事務所・作業所は、平成3年以降、小売りを辞めた元商店や住宅、空き地などが事務所や資材置き場へと変化したものが多い。また、昭和50年から平成26年までの土地利用変化のうち最も顕著なもの1つが、駐車場の増加である。昭和50年には1か所であったものが、平成3年には7か所となり、平成26年には14か所と倍増した。これに関しては2つの要因が考えられる。まず1つ目は、モータリゼーションへの対応策としての、来店者用駐車場設置であり、内町においては約10台の自動車を受容可能な共同駐車場が建設されている。2つ目は特に平成3年以降急増した空き店舗や空き家の跡地における駐車場の建設である。現在谷田部市街に存在する駐車場のうち2か所は月極駐車場であり、その他にも来店者向けではない駐車場が数多く存在している。昭和50年以降生じた空き店舗・空き家は、駐車場に転用されるケースも多いが、それでも平成3年に6軒、平成26年に12軒と増加し続けている。空き地は昭和50年には5か所で



第20図 シャッターを降ろした商店

あったものが平成3年には駐車場になる等して2か所に減少したが、平成26年までには8か所と増加に転じた。住宅は昭和50年時点で46軒存在し、平成3年は39軒、平成26は48軒となっている。昭和50年から平成3年にかけての住宅数の減少は、住宅が空き家や駐車場へと変化したために起きたものである。平成3年から平成26年にかけてもこのような転用は引き続き起こっているものの、それを上回る数の商店の廃業に伴う一般住宅化が起こり、結果として住宅数は大幅に増加している。現在の谷田部市街においては、街路に面した商店にはシャッターが降ろされ、奥につながる住宅に居住しているというケースが支配的である（第20図）。平成3年の調査によると、谷田部市街で経営を行う商店の72パーセントが土地・店舗ともに自己所有、また82パーセントが職住一体となっており（高橋伸夫ほか<sup>22)</sup>、このことが、商店廃業後も元経営者が谷田部市街に居住し続け「シャッター街」の景観が維持される要因の1つとなっていると考えられる。

### （3）『筑波郡案内記』にみる大正期谷田部の商業活動

本節では『筑波郡案内記』<sup>23)</sup>（大正8（1919）年）を用い、大正期・昭和戦前期谷田部の商業活動の一端を見ることとする。『筑波郡案内記』に関しては大正3年刊および大正8年刊の2種類を確認したが、本文の記述内容に大きな差は見られなかった。但し、巻末の広告は大正3年刊に掲載はなく、大正8年刊のみの掲載である。

まず、谷田部町の交通・運輸に関して以下のような記述がある。

交通 運輸 東に土浦、西に水海道、北に北條筑波あり、縣道四方に通ずれども、鐵路、舟運等の直接利便に浴すること能はざるの地なれば、物資の集散あるなく、商業は土浦、水海道にその勢を殺がれ、郡役所、警察署の所在地といふに止り、交通甚だ頻繁ならず。通信機関としては谷田部町に郵便電信電話局

第2表 『筑波郡案内記』掲載の広告にみる大正後期・昭和戦前期谷田部の商工業者及び有力者

no.	屋号・職業名	名前	営業品目（/改行）	備考	他資料との対応
1	株式会社土浦五十銀行谷田部支店	-	-	-	-
2	-	高野新八	米雑穀 / 各種肥料	電略 カマシ	-
3	奥澤清吉商店	-	内外肥料 / 米穀	-	-
4	仁寿生命保険株式会社 代理店	奥澤清吉 山中勝蔵	-	本店所在地 東京市。	商工人名録：米穀肥料商 奥澤清吉
5	谷田部町長	沼尻熊太郎	-	-	-
6	郡会議員	渡邊平吉	-	-	-
7	-	大木五左衛門	-	-	道林寺石碑：金八円寄付 大木五左衛門
8	材木商	沼尻太一郎	-	-	獣霊碑：沼尻太一郎
9	橋本医院	橋本重忠	内外科 / 眼科 / 耳鼻咽喉科 / 産婦人科	-	-
10	横田医院	横田建一	内外科 / 小児科 / 耳鼻喉科	-	-
11	玉川堂	-	和洋菓子卸小売 / 砂糖白米 薪炭商	-	-
12	岡野印刷所	岡野幹造	石版 / 活版 / 諸帳簿	-	-
13	池田一貫堂	-	図書 / 文具	-	-
14	-	奥澤謙三郎	図書 / 文具 / 洋品 / 雑貨	-	商工人名録：材木商 奥澤謙三郎 道林寺石碑：金五円寄付 奥澤謙三郎
15	-	宮本彌兵衛 宮本平兵衛	煙草元売捌人 / 呉服太物 / 度量衡器	-	- 商工人名録：呉服太物商 宮本平兵衛
16	沼屋	沼尻民平	醤油醸造 / 乾物商	-	道林寺石碑：金十円寄付 沼尻民平
17	奥澤栄七商店	-	内外肥料 / 米雑穀商	電信略号（オクエ）	-
18	町会議員 / 消防部長 / 学務委員	長瀬市兵衛	肥料米穀 / 塩元売捌人 / 報徳銀行谷田部 / 派出所主任	-	商工人名録：米穀肥料 長瀬市兵衛
19	成田館	成田よね	旅館	-	獣霊碑：谷田部町料理店 金五円 成田
20	泉屋	奥澤はる	旅館	-	-
21	-	高橋秋之助	建築請負 / 材木商	-	商工人名録：土木請負業 高橋秋之助
22	-	高橋高次郎	和洋酒 / 荒物商	-	-
23	-	城取巳之助	桐材 / 下駄製造販賣	-	道林寺石碑：各字世話人 谷田部町 城取巳之助
24	三岡二助商店	-	葉茶小間物 / 売薬各種	-	-
25	-	軽部浦次	万染物	-	道林寺石碑：各字世話人 谷田部町 軽部浦次
26	-	羽田久次郎	繭絲商 / 製茶	電略（ハタ）	-
27	釜屋自轉車店	猪瀬濱太郎	モノボール号 / ビリケン号 / ダビー号 / 其他各国製 / 自転車販売 / 繭糸買次	電略（イノセ）	-
28	飯泉商店	-	綿糸棉花 / 鐵材荒物 / 陶器漆器 / 金物油類商	丸木屋號	-
29	大黒屋	高橋長助	桐材下駄 / 製造販売	-	-
30	-	大竹武雄	薬種売薬染草類 / 洋酒缶詰荒物類 / 和洋小間物洋物 / 化粧品煙草雑貨	-	-
31	野寺商店	野寺由三郎	シンカーミシン / 代理店 / 足袋肌着衣類販賣	-	-
32	-	高野栄蔵	醤油醸造業	-	道林寺石碑：各字世話人 谷田部町 金五円寄付 高野栄蔵
33	大忠	-	御中食	-	-
34	石橋商店	-	米穀酒類 / 薪炭材木	-	-
35	-	鈴木寅之助	鮮魚 / 乾物 / 和洋酒商	-	道林寺石碑：金三円寄付 鈴木寅之助

no.	屋号・職業名	名前	営業品目（/改行）	備考	他資料との対応
36	荒木屋	渡邊松野	呉服商	-	-
37	中屋洋品店	-	帽子洋傘/メリヤス/靴鞆各種	-	-
38	-	中根虎一郎	材木商	-	-
39	泉惣呉服店	高野房吉	呉服/太物	-	-
40	福屋呉服店	大木勝平	呉服/太物	-	-
41	飯田商店	飯田武平	繭糸商	-	-
42	-	青柳子之介	材木商	-	道林寺石碑：金十円寄付 青柳子之介
43	小川商店	-	足袋肌着衣/股引/メリヤス類	-	-
44	住吉屋商店	-	太物/洋物/荒物	-	-
45	鍋屋今高商店	-	太物/洋物/荒物	電略（イマ）	-
46	-	岩田恒平	和洋菓子/砂糖小麦粉商	-	-
47	大塚商店	大塚啓一郎	和洋酒類/販売業	-	-
48	-	今川市四郎	太物/洋物	-	-
49	鞋部亭	-	料理店	-	-
50	梅屋	広瀬むめ	旅館/料理店	-	-
51	住吉屋	佐藤とよ	旅館	-	-
52	浅野亭	浅野こう	御料理	-	-
53	釜市	長瀬太助	鮮魚/乾物商	-	道林寺石碑：各字世話人 谷田部町 長瀬太助
54	-	今川勇美	薬種商	-	-
55	-	吉田皆吉	米穀肥料商/繭買入所	-	-
56	町会議員	高橋林造	-	-	道林寺石碑：金十二円寄付 高橋林造
57	谷田部郵便局長	谷田部町助役 宮本富三郎	-	-	-
	穀物生産検査員	江原茂三郎	-	-	-
		齋藤慎一郎	-	-	-
		今川元喜	-	-	-
58	町会議員	庄司金之助	-	同町〔筑波郡谷田部町〕大字 萱丸	道林寺石碑：金七円寄付 佐藤善松
		飯泉良太	-		
		飯泉長吉	-		
		佐藤善松	-		
59	-	中島木太郎	-	-	道林寺石碑：各字世話人 谷田部町 中島木太郎
		木村縫吉	-		
60	-	岡田太平	-	-	道林寺石碑：沼尻恒三郎 飯村□三郎
		沼尻恒太郎	-		
		飯村徳三郎	-		
61	会議員	中島正美	-	-	-
62	沼喜商店	岡野登作	-	-	-
63	朝日屋	大久保よし	御中食	-	-
64	魚善	-	鮮魚/御料理/御中食	-	-
65	寺田屋	岡野ます	御料理/御中食	-	獣霊碑：谷田部町料理店 金三円 岡野ます
66	本外	岡野兵助	旅館	-	獣霊碑：谷田部町料理店 金三円 岡野兵助
67	亀屋	石田安蔵	和洋菓子/卸小賣	-	-
68	橋本	新井国之助	御料理/小間物/雜貨	-	-
69	相馬屋	榎根本平藏	鮮魚/御料理/御中食	-	獣霊碑：谷田部町 料理店 金三円 榎根本
70	高橋	-	料理店	-	獣霊碑：谷田部町 料理店 金五円 高橋吉□
71	-	宮本清五郎	製麺/荒物商	-	-
72	-	高橋まき	薪炭/白米	-	-
73	-	庄司喜一郎	-	-	-
73	-	飯泉為輔	-	-	-

注) ⑤他資料との対応について、「商工人名録」は、商工社編・発行『日本全国商工人名録（第5版）』（大正3年）、「道林寺石碑」は、道林寺石碑、昭和4年建立を示す。



第21図 玉川館外観

木村昭二「木村昭二のペンとカメラによるなんじゃもんじゃばなし 連載第13回 さようなら玉川館」竹島茂「筑波の友」STEP。1992。18頁より転載。木村によると、建物はトタンで覆われている。

あり。明治七年の創立にして、現今の集配区域は左の如し。

谷田部町、眞瀬村、名島村、小野川村、葛城村、福岡村

谷田部町は土浦・水海道・北條筑波に通じる位置にあるにもかかわらず、鉄道や舟運に恵まれなかった。そのため、交通や商業の面で土浦・水海道に及ばない規模で、官公署の所在地にとどまったとの認識である。

さらに、谷田部町内に関して、本文には以下のような記述がある。

谷田部 本町の東北部に位する最大部落にして、亦本町の幹部なり。(中略) 現時も殆ど之に變ることなく、舊陣屋跡は郡役所となれり。その他一郡の中央町村として此處に存在せる官公署及び神社寺院舊蹟等を擧ぐれば、臺町の長徳寺、愛宕神社、小渡山薬師堂、内町の警察署、郵便局、町役場、小學校、土浦五十銀行支店、八坂神社、二之丸の八幡神社、多賀谷經伯墓、中城の谷田部城址、新町の明越寺、不動町の不動院及び不動並木、西

町の土浦區裁判所出張所、靈神社、道林寺にして、就中内町、西町、新町の邊人家最も稠密小市街の觀を呈せり。

谷田部は「一郡の中央町村」であり、警察署や郵便局、町役場等の官公署及び寺社が存在し、内町・西町・新町には人家が集中し小市街のようであったことが記されている。

また、『筑波郡案内記』（大正8年）巻末には広告が掲載されており、①屋号または職業名、②広告主名と考えられる名前、③営業品目と考えられるものの記載がある。ただし、谷田部における営業者のうち広告を出したのは一部であると想定されること、①～③全ての記載がある広告ばかりではないこと、営業品目に関しては改行箇所により品目内容の読みとりは異なりうることを考慮する必要がある。第2表では、掲載された広告のうち、筑波郡谷田部町と示されているものに関し、先述の①～③を備考として整理した。営業品目をみると、料理店・御料理10、旅館5であり、交通や商業の一拠点であったと推測される。衣料品関連項目は太物5のほかは呉服、足袋、ミシン、帽子洋傘、染物である。図書、医療、菓子・酒類といった嗜好品を扱う店舗の広告も数軒ずつみられることから小規模な町場としての機能がうかがえる。また、肥料の取扱店広告は4で、周辺農村の需要が推測される。

#### (4) 谷田部市街の娯楽施設

##### 一芝居・映画に着目して一

本節では、谷田部にあった映画館・玉川館についての記事と観客への聞き取りをもとに、娯楽施設の立地という観点から谷田部の性格を検討する。

玉川館は谷田部四ツ角で現在も大福など和菓子の製造・小売を行う玉川堂が経営していた映画館である。玉川堂が面する国道354号線旧道の南の路地沿いに立地していた。玉川堂の玉川進一郎氏（昭和9（1934）年生）によると、創立年は明確ではないが、大正末ごろから活動写真、その後は

第3表 『映画年鑑』(1960年)を中心にみる谷田部周辺地域の映画館

no	館名	所在地	電話	経営者	支配人	構造	冷暖房	定員	系統	備考
1	小野座	土浦市	土浦1143	小野盛興行	小野勝	木造二階建	暖	410	洋画	
2	霞浦映画劇場	土浦市	土浦822	前田一郎	山本喜久雄	木造二階建	-	-	松竹	
3	土浦映画劇場	土浦市	土浦175	関口卓男	関口卓男	木造二階建	-	590	東宝・新東宝	
4	土浦東映映画劇場	土浦市	土浦661	小口商事	小口登	木造二階建	-	490	東映	
5	祇園セントラル劇場	土浦市	土浦1554	中島棟次	小島博	木造二階建	-	260	洋画	
6	土浦大映映画劇場	土浦市	土浦880	アサヒ産業	-	木造二階建	暖	460	日活	1962年版：構造 鉄筋骨二階建
7	荒川沖映画劇場	土浦市	荒川沖69	泉弘昭	泉弘昭	木造二階建	-	300	邦洋各社	1965年版～記載無
8	下妻映画劇場	下妻市	下妻328	清家不二雄	田宮功	木造平屋建	-	228	東映・松竹・新東宝	1964年版～記載無 1969年版再記載
9	弘楽館	下妻市	下妻240	東郷通行	浅野道夫	木造二階建	暖	438	大映・日活・東宝	1967年版～記載無
10	セントラル劇場	水海道市	水海道330	東郷通行	岡野八郎	木造平屋建	-	235	邦画	1964年版～記載無
11	宝来館	水海道市	水海道118	東郷通行	平井甚三	木造二階建	暖	432	邦画	
12	牛久映画劇場	牛久町	牛久44	中島棟次	-	木造平屋建	-	250	邦洋各社	1965年版～記載無
13	新栄館	谷田部町	-	泉総一郎	-	木造二階建	-	180	邦洋各社	1963年版～記載無
14	玉川館	谷田部町	-	玉川春吉	-	木造二階建	-	380	邦洋各社	1965年版～記載無
15	北条映画劇場	筑波町	北条26	泉総一郎	-	木造二階建	-	470	邦洋各社	1966年版～記載無
16	上郷三喜館	豊里町	上郷47	佐藤さく	-	木造平屋建	-	180	邦洋各社	1964年版～記載無
17	大嘗根劇場	大穂町	大穂35	佐藤さく	-	木造平屋建	-	180	邦洋各社	1964年版～記載無
18	吉沼劇場	大穂町	吉沼16	原ちよ	-	木造二階建	-	340	邦洋各社	1964年版～記載無
19	真壁館	真壁町	真壁35	刈部宗四郎	刈部昭	木造二階建	-	845	邦画	
20	新映館	真壁町	真壁35	刈部宗四郎	刈部昭	木造平屋建	-	380	邦画	1964年版～記載無
21	三嘉館	石下町	石下112	佐藤さく	磯真	木造二階建	-	253	邦画	1964年版～記載無
22	岩井宝来館	岩井町	岩井76	東郷通行	文随あさ	木造平屋建	-	232	邦画	1964年版記載無 1965年版再記載
23	取手映画劇場	取手町	取手143	柴谷由雄	芦刈軍平	木造平屋建	-	480	邦洋各社	1968年版～記載無
24	取手日の出劇場	取手町	取手64	北日本興行	村上勝男	木造二階建	-	280	日活・洋画	
25	守谷劇場	守谷町	守谷2	下村新蔵	-	木造平屋建	-	300	松竹・東映	1964年版～記載無
26	藤代会館	藤代町	藤代16	菅谷しげ子	-	木造平屋建	-	200	松竹・東映	1964年版～記載無
27	山王会館	藤代町	-	山王会館	-	木造平屋建	-	250	邦画	1962年版～ 1964年版～記載無

注) 『映画年鑑』(1960年)をもとに1962～1970年発行の掲載情報を加筆。いずれも調査年は前年である。no.7. 12. 16-18. 22. 26. 27は本文中で野村写真館のツネ氏が挙げた映画館と推定されるもの。「- (ハイファン)」は記載なし。

第4表 玉川館で興行したと推定される芸能人

記事中の話者	玉川館で興行したと挙げられた人名	推定される芸能人(職業)
須藤 酒店 のフミ氏	ハタケヤマミドリ	畠山みどり(歌手)
	キタジマサブロー	北島三郎(歌手)
	サツキミドリ	五月みどり(歌手・俳優)
	ヒラオマサアキ	平尾昌晃(歌手)
野村写真館のツネ氏	ショージタロー	東海林太郎(歌手)
	コウタカツタロー	小唄勝太郎(歌手)
	フタバアキコ	二葉あき子(歌手)
	シバツツルコ	柴田つる子(歌手)
キヨ氏の息子シンイチロー氏(映写技師)	ミヤギマリコ	宮城まり子(歌手)
	ヒロサワトラゾー	広沢虎造(浪曲師、何代目かは不明)
	カスガイバイオー	春日井梅鶯(浪曲師)
	ミカドヒロシ	三門博(浪曲師)
	オカハルオ	岡晴夫(歌手)
	ムラタヒデオ	村田英雄(歌手)
	ミウラコウイチ	三浦洗一(歌手)
	イノウエヒロシ	井上ひろし(歌手)
イイダヒサヒコ	飯田久彦(歌手)	
	ニシムラコラクテン	西村小楽天(司会・活動弁士)

木村昭二「木村昭二のペンとカメラによるなんじゃもんじゃばなし 連載第13回 さようなら玉川館」竹島茂「筑波の友」STEP. 1992. 19-20頁の内容から作成。

邦画の上映を行っており、映画全盛期には週に1～2作品を上映していた。館内には別業者による売店を設け、清掃は外部に委託していた。『映画便覧』(1960年版)<sup>24)</sup>には、木造二階建てで冷暖房の設備はなく、定員380名、との記載がある。経営者は玉川春吉氏で、玉川進一郎氏の祖父である。1962年版から1964年版には玉川館の掲載があり、1965年版調査時の1964年には営業を辞めている可能性も考えられる。なお、平成4(1992)年7月に取り壊されたため、現存しない(第21図)。

荒木利巳氏(昭和38(1964)年生)は、幼少時に島名(谷田部から西に3キロメートルほどの農村部)の自宅から玉川館に子ども向けの映画を見るためにバスで訪れたことがあるという。もちろん大人を対象とした映画も上映していたが、当時土浦で上映していた成人向けの映画ではなかったと語る。

木村の記事<sup>25)</sup>中で野村写真館のツネ氏は、映画『君の名は』(1953年製作。菊田一夫原作、大庭秀雄監督。岸恵子、月丘夢路、淡島千景などが出演。)の興行は行列ができるほど人気であったと

述べる。その頃の映画館は社交場であり、映画全盛期には水海道の岩井の他に「ホウジョウ」(北条、( )内筆者)、「オーホ」(大穂)、「カミゴウ」(上郷)、「フジシロ」(藤代)、「アラカワオキ」(荒川沖)、「ウシク」(牛久)にも映画館があったという(第3表)。

また、木村の記事には芸能人が興行に訪れていたことが記されている(第4表)。玉川堂息子シンイチロー氏は「一行三十名ぐらいで、楽士二十名ぐらいに司会者に本人と前座の歌手数名とマネージャーというのが平均でしたね」と述べている。

芸能人の興行の頻度について、玉川進一郎氏は年に何度か歌謡ショーを開催していたと述べる。

荒木氏・玉川氏の話や木村の記事から、玉川館は当時人気の映画が上映されたり、年に数度芸能人が興行に訪れたりする娯楽・社交の場所としての機能を有していたことがわかる。加えて、興行に訪れた芸能人一行が一時的に滞在する場所も内包していたと推測される(第4表)。

木村の記事から玉川館は焼失・再建期があったことがうかがえる。野村写真館のツネ氏は「玉川館は昭和六年に新しく建てたもので、俺も六年生まれだから同じ」と述べる。玉川堂の息子シンイチロー氏は、昭和8年に煙草の不始末で玉川館は焼失し、再建時の資金不足のため広告料を取って第22図のような天井広告を配したと述べている(第22図)。

第22図から読みとれる広告を上段から見ていく。まず最上部左から「□原靴店」(横書、2枠)、「紳士服仕立」(横書、1枠)、「肉店 話 五八番」(縦書、2枠カ)、「定」(1枠)、「高野」(横書、1枠)、「(記号) 醤油」(横書、1枠)、「木炭」(横書、1枠)である。続いて上部二段目左から「山田商店」(横書、1枠)、「食堂 がまん本店」(縦書、1枠)、「(温泉記号) 梅屋 旅館」(縦書、1枠)、「木村写真館」(横書、5枠)とある。中央三段目左「酒店」、中央三・四段目左から「大忠油店 電話二一番」(縦書、2枠)「内科外科皮膚科 田村醫院 電話一三三番」(縦書、2枠)、「朝日新



原	靴店	紳士服仕立	肉店 話五八番	定	自動車	高野	醬油	木炭
	山田商店	がまん 本店	馬梅屋 旅館	木	村	寫	眞	館
	酒店	大忠	内科外科 田村	朝日新聞 読売新聞 毎日新聞 日本経済新聞 いはらき	▲▲江原		★江原	旭屋
		電話二番 油店	皮膚科 醫院 電話一三番	各販売 池田新聞店 電話七二番	□煉炭店		石油店	旅館
		銘 住の	酒江	特約店 須藤 電話	酒店 七九番		天	
	河原 家具	青柳	大竹	寺田 良味覚 ク キヤ	石橋	酒店		

第22図 (上) 玉川館の天井広告の写真, (下) 筆者判読部分

(上) は木村昭二「木村昭二のペンとカメラによるなんじゃもんじゃばなし 連載  
第13回 さようなら玉川館」筑波の友73, STEP, 1992, 19頁より転載。

聞 読売新聞 毎日新聞 日本経済新聞 いはらき 各販売 池田新聞店 電話七二番」(縦書, 2 枠), 「(三つ鱗記号) 江原□煉炭店」(縦書, 2 枠), 「(星印記号) 江原石油店」(縦書, 2 枠), 一列開けて「(温泉記号) 旭屋旅館」(縦書, 2 枠)。下部五段目左から「銘酒 住の江 特約店 須藤酒店 電話七九番」(横書, 4 枠), 一列空けて「天」(1 枠)とある。そして, 下部六段目左から「家具 河原」(縦書, 部分), 「青柳」(縦書, 部分), 「大竹」(縦書, 部分), 「寺田 良味覚

ク キヤ」(縦書, 部分), 「石橋酒店」(横書, 2 枠)とある。天井広告全体を確認することはできないが, 少なくとも谷田部中心部に立地する店舗の広告を確認できる。広告の内訳は木炭・石油・練炭など燃料取扱 4, 酒取扱 3, 旅館・食堂 3, 衣料品 2, 精肉・醤油・菓子・家具・写真館・新聞が各 1 である。

先述の荒木氏によると, 普段は谷田部四ツ角までバスに乗り, 乗り換えて水海道や土浦に行っていた。乗り換えの待ち時間に和泉屋で食事をとったり, 父親が玉川館の並びのパチンコ店を利用したりしていた。しかし, 小学生の頃に島名・真瀬から土浦までバス路線が開通したため, 経由地としては谷田部を利用しなくなったという。なお, パチンコ店に関しては, 玉川進一郎氏も玉川館周辺に 7~8 軒のパチンコ店が営業していたと述べている。

玉川館は谷田部内外の人が利用する施設であったために広告を設置する価値もあり, 集まった広告料を用いて再建に至った。荒木氏の話から谷田部周辺の居住者が映画を見に行くあるいは買い物をするために谷田部に行くとは言い切れず, 水海道や土浦への中継地として谷田部を利用していた

こともうかがえる。しかし, たとえ中継地であったとしても, バスの乗り換え時間における食事や余暇活動の場としての機能を持っていたことが推測される。

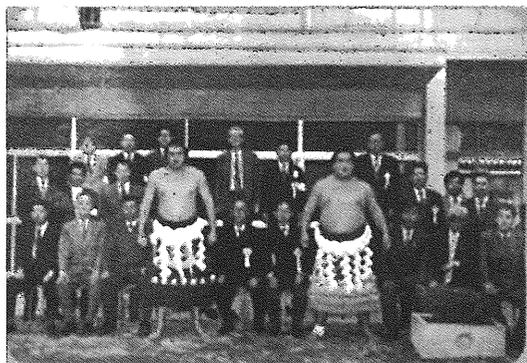
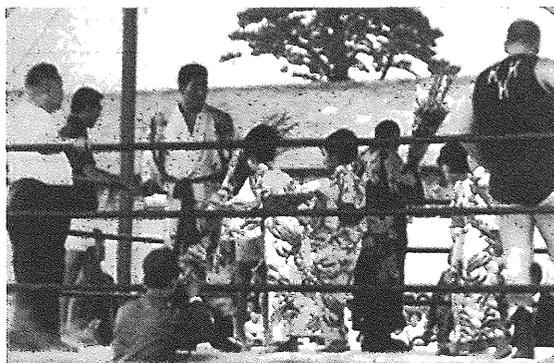
玉川館及び周辺のパチンコ店といった常設の娯楽施設以外にも, 谷田部における娯楽施設の存在をうかがわせるものがある。荒木氏の場合, 小学生ごろに谷田部小学校で開催された相撲の地方巡業「大相撲 谷田部場所」を観にいった記憶があるという。常設・その他の際にも娯楽施設があったことで, 娯楽を楽しんだ人々のようすが想像される(第23図)。

#### IV. 谷田部と近隣市街地との性格の差異

##### (1) 近代期における谷田部町

谷田部町は近世期において谷田部藩 1 万 6,000 石の城下町であった。谷田部藩は 1 万 6,000 石の小藩であったため, 周辺農村部における商業拠点としての発展は乏しかった。

明治 7 (1874) 年に谷田部郵便局の設置以来, 明治 9 (1876) 年に土浦警察署の管轄として谷田部警察出張所(明治 19 (1886) 年, 谷田部警察署



第23図 (左) 谷田部小学校におけるプロレス興行(昭和41年) 谷田部小学校庭に特設リングを設け, プロレス試合が行われた。ジャイアント馬場が出場した。  
(右) 谷田部町役場地鎮祭一輪島と琴桜(昭和49年) 谷田部町役場の地鎮祭と同時に開催された大相撲興行。谷田部小の玄関前にて撮影。なお, 相撲博物館の土家喜敬氏によると1974年4月26日に開催した。  
いずれの写真も, 井坂敦実ほか編『保存版 土浦・石岡・つくば・かすみがうらの今昔』郷土出版社, 2008, 180頁より転載。

第5表 近代期における茨城県・筑波郡・谷田部町の戸口

	茨城県		筑波郡		谷田部町	
	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数
明治28(1895)年	1,085,445	178,770	61,347	9,258	—	—
明治33(1900)年	1,177,080	187,030	73,326	11,859	4,291	778
明治38(1905)年	1,220,075	203,516	74,271	12,200	4,378	787
明治43(1910)年	1,280,638	213,736	78,475	12,417	4,743	760
大正4(1915)年	1,366,751	223,880	81,413	12,518	4,680	776
大正9(1920)年	1,358,864	261,275	79,697	14,516	4,589	884
大正14(1925)年	1,416,969	272,786	79,813	14,470	4,769	880
昭和5(1930)年	1,487,297	277,983	83,309	14,612	4,976	905
昭和10(1935)年	1,550,188	284,140	84,666	14,771	5,210	945

注) 明治28(1895)年の谷田部町の人口・戸数はデータ欠。  
 (『茨城県統計書』より作成。)

に改称), 明治11(1878)年に筑波郡役所, 明治20(1887)年に土浦区裁判所谷田部出張所, 明治29(1896)年に谷田部税務署<sup>26)</sup>が設置された。郡役所は, 県と町村の中間に位置する行政機関であり, 郡内町村を統括した機関である。郡役所はじめ明治期の谷田部町には筑波郡の中心地として様々な行政機能が集積した<sup>27)</sup>。

また, 明治8(1875)年の谷田部小学校開校をはじめ, 明治39(1906)年, 石川温習学校, 大正12(1923)年, 谷田部女子農業補習学校, 大正15(1926)年, 谷田部町立補習学校といった教育機関が設立された(第24図)。明治44(1911)年には五十銀行谷田部支店が設立された。行政機関以外においても教育機関, 金融機関も谷田部町に設立された。

明治4(1871)年の廃藩置県より明治8年まで, 土浦を県庁所在地とする新治県に属していた。警察署, 裁判所, 税務署の管轄や五十銀行の本店が土浦町であることから, 谷田部町の上位都市には土浦町が存在していたことがうかがえる。

一方, 北条町には明治6(1873)年に北条郵便局, 明治10(1877)年に北条警察出張所, 明治22(1889)年に土浦区裁判所北条出張所が設置された<sup>28)</sup>。筑波郡の行政機能は北部の中心地である北条町にも集積していた。

戸口に着目すると, 明治33(1900)年において谷田部町の人口4,291人・778戸であった(第5



第24図 大正・昭和期の谷田部市街-谷田部家政女学校付近-  
 (谷田部の歴史編さん委員会編『谷田部の歴史』141頁より転載。)

表)。筑波郡の戸口と比較しても筑波郡の総人口の1割にも満たない町である。昭和10(1935)年までに人口は約1,000人, 戸数は約160戸増加しているが, 緩やかな増加をしている。谷田部町自体が1,000戸に満たない町であり, 筑波郡内でも突出して戸口が多い訳ではないことが指摘できる。

## (2) 営業税等級にみる明治期谷田部の位置付け

『茨城県統計書』の一部の年次には「地方税々率」の表が掲載されている。主に営業税の賦課額がそれぞれ業種ごとに掲載されている。卸小売商, 酒類請卸小売商, 米雑穀商, 仲買商, 質屋,

第6表 茨城県における営業税の地位等級

業種	谷田部町の等級	筑波郡内の他町村の等級	最下級
卸小売商	4等地	3等地 北条 5等地 上郷、高道祖 6等地 菅間、小田、谷井田、鹿島、田井、吉沼、真瀬、板橋、久賀	7等地
酒類請小売商	6等地	5等地 北条 7等地 高道祖、小田、上郷、真瀬、鹿島、福岡、吉沼、板橋、小張、筑波	8等地
米雑穀商	5等地	4等地 菅間、谷井田 6等地 高道祖、豊、小田、真瀬、田井、十和、吉沼、鹿島、小張 7等地 筑波、三島、福岡、板橋、島名、作岡	8等地
仲買商	8等地	3等地 菅間 5等地 北条 6等地 高道祖、上郷 7等地 真瀬、吉沼	8等地
質屋	4等地	4等地 上郷、菅間、筑波 5等地 北条、吉沼、真瀬、旭、小張 6等地 高道祖、小田、田井、久賀、島名、作岡	7等地
古物商	7等地	6等地 北条、吉沼、谷井田、久賀	7等地
旅人宿	6等地	3等地 北条 4等地 筑波 6等地 菅間、上郷 7等地 小田、高道祖、吉沼、田井	8等地
運送業	8等地	8等地	8等地
製造所	8等地	6等地 筑波、北条、小田	8等地
料理屋	6等地	4等地 筑波、北条 5等地 上郷 6等地 高道祖、菅間、小田、吉沼、板橋、久賀	7等地
飲食店	4等地	3等地 北条 4等地 上郷、吉沼、板橋、筑波	5等地
湯屋	4等地	3等地 北条、吉沼、高道祖、上郷	4等地

(『茨城県統計書』(明治29年)より作成。)

古物商、旅人宿、運送業、製造所、料理屋、飲食店、湯屋については、都市の等級により営業税賦課額が異なっている。卸小売商7等地、酒類請卸小売商8等地、米雑穀商8等地、仲買商8等地、質屋7等地、古物商7等地、旅人宿8等地、運送業8等地、製造所7等地、料理屋7等地、飲食店5等地、湯屋4等地に区分されている。

谷田部町についてみると、卸小売商4等地、酒類請卸小売商6等地、米雑穀商5等地、仲買商8等地、質屋4等地、古物商7等地、旅人宿6等地、運送業8等地、製造所8等地、料理屋6等地、飲食店4等地、湯屋4等地に区分されている。谷田部町はいずれも中堅以下の等級を付けられている(第6表)。

筑波郡内の他の都市をみると、北条町、筑波町、上郷村、吉沼村、高道祖村などが挙げられている。特に北条町は、卸小売商3等地、酒類請卸小売商5等地、仲買商5等地、質屋5等地、古物商6等地、旅人宿3等地、製造所6等地、料理屋4等地、飲食店3等地、湯屋3等地に分類されている。卸小売商、酒類請卸小売商、仲買商、古物商、旅人宿、製造所、料理屋、飲食店、湯屋は北条町の方が谷田部町よりやや高い等級に位置付けられている。このことから、行政的機能のみならず、商業機能においても筑波郡北部の北条町と筑波郡南部の谷田部町に分化していたことがうかがえる。

### (3) 筑波郡内における大正期谷田部の位置付け

『日本全国商工人名録（第5版）』<sup>29)</sup>は市郡別に営業科目、営業人名、営業税、所得税、所在地が記載されている。また、一部であるが、振替貯金口座・電話番号・取引銀行も掲載されている。

営業科目はおおむねその地域について重要物産を第一位とする。掲載基準は原則、営業税30円以上とされており、全商工人を網羅している資料ではないが、有力な商工人を把握するには十分な資料である。

筑波郡は新治郡と同じ項目に挙げられており、新治郡には石岡町、土浦町という商業地が含まれている。新治・筑波二郡で挙げられる営業科目は、米穀肥料、酒造業、醤油醸造業、和洋酒類商、干物魚類商、鶏卵問屋、製粉商、砂糖商、金物商、陶漆器商、呉服太物商、薬種商、書籍文具商、菓子商、荒物紙商、絞油及び石油商、履物商、材木商、運送業、土木請負業、旅人宿業、料理店、銀行業、株式会社、各種営業である。

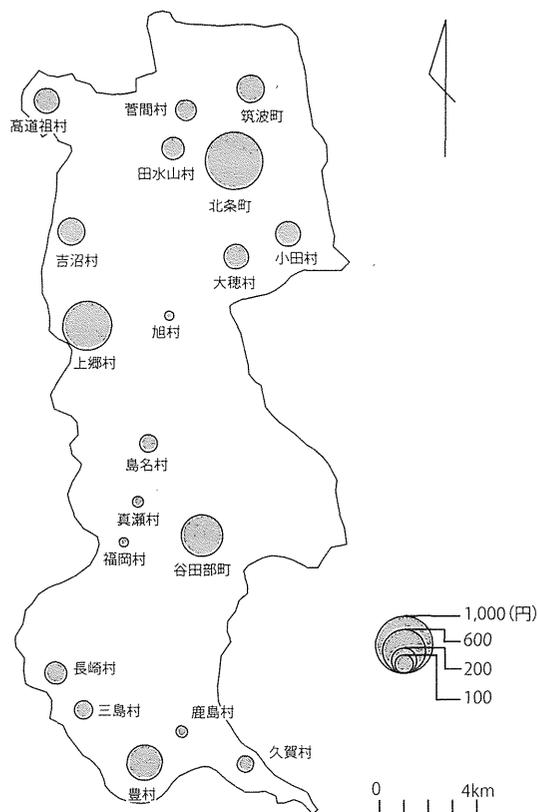
谷田部町の商工人数は10人が挙げられている。一方、北条町13人、上郷村11人であり、谷田部町が突出して多いとは言えない。また、筑波郡内の農村部においても米穀肥料商、酒造業に挙げられる商工人は地主の多角経営の可能性が推察される。

営業税金額についてみると、谷田部町612円53銭であるが、北条町1,054円59銭、上郷村761円41銭に次ぐ筑波郡内において第3位である（第25図）。そして、筑波町235円52銭、吉沼村236円24銭、大穂村216円90銭、谷井田村433円11銭と続く。

営業税からも、筑波郡内において谷田部町は経済的中心性が極めて高いとはいえない。筑波郡北部の北条町のみならず、上郷村、筑波町、吉沼村など筑波郡内における他の商業地の存在が相対的に谷田部町の地位を低くしていると考えられる。

### (4) 『中央商店街診断書』にみる昭和期谷田部の位置付け

第二次大戦後、茨城県商工部等により谷田部町



第25図 大正期における筑波郡の町村別営業税額  
注) 図中に記載がない町村はデータ欠を示す。  
(商工社『日本全国商工人名録（第5版）』より作成。)

の中央商店街診断が行われた。谷田部町時代は昭和42（1968）年<sup>30)</sup>、昭和50（1975）年<sup>31)</sup>の2回に渡り診断が行われ、診断報告書が発行されている。

昭和42年の診断報告書において、商店街の通行量、個別商店の経営実態、買い物行動などを調査した上で、「当面とるべき改善事項」として、商店街共同組織を確立すること、経営者は管理能力を高めるためにあらゆる努力をすることが指摘されている。

また、当商店街を構成する商店の通弊として、①店舗の陳列配置が悪いこと②仕入れに計画性がないこと③商品構成に特徴がないこと④広告宣伝

が積極的でないこと⑤サービスが悪いこと⑥在庫の棚卸をしていないこと⑦資金繰りが計画的でないこと⑧計数把握が行われていないことの8点を指摘している。商店街の活性化には、個々の商店が充実し、近代化することであると言いつけられている。

7年後の昭和50年の診断報告書では、「勧告」としてより具体的な指摘がなされている。モータリゼーションによる上位商業都市への買い物客流出、筑波研究学園による新規商業施設の建設による環境変化により谷田部町の中央商店街の「存立基盤の危機」が指摘されている。

谷田部町の買物環境が決して良くない理由として、自動車交通量の増加と商店街近代化の遅れを指摘している。その上で、商店街の基本的機能の認識、買物環境整備のためのセットバックによる歩道の確保、アーケード造成、商店会を設立して積極的な団体活動による駐車場の整備、特売日、スタンプ・サービス事業、研修会の実施を勧告している。

個別店舗経営にも、店舗のイメージアップ、経営管理能力の向上、パートタイマー採用による従業員確保、スーパーマーケット出店対応、外商強化を指摘している。

谷田部町の中央商店街の実態について、いずれの報告書においても、県が谷田部町商店街の活性化を期待する故の厳しい指摘がなされていると考えられる。谷田部町の中心商店街は、昭和期において、第二次大戦後、海軍航空隊の解体による影響以後、商店街内部の変化に迫られたのみならず、モータリゼーション、筑波研究学園都市建設という外的変化への対応も迫られた。すでに、商店経営に対して痛烈な指摘をされるような状況であった。

## V. おわりに

本稿は、茨城県つくば市内に位置する旧谷田部町の谷田部市街を研究対象とし、近代期から現代に至るそのにぎわいの実像を明らかにすることを

目的として考察を行ったものである。これは、現代の谷田部市街には商業地区としてのにぎわいが見出しにくくなっているが、かつての谷田部には今日とは比較にならないほどにぎわいをみせた時期があり、その具体的な様相を正確に記述しておく必要があるという問題意識にもとづく。考察は、まず中心地谷田部を支える後背地に着目し、後背地にあたる農村の暮らしからみて谷田部がいかなる存在であったかを検討した。次いで、谷田部市街それ自体の集落としての特色や商業機能の移り変わりを検討した。さらに、谷田部が持つ中心地機能の一つである娯楽機能に着目し、実際に谷田部を訪れた人々の眼から見た谷田部の娯楽の具体像を示した。そのうえで、谷田部と競合する北条など他の中心地との比較を行い、広域からみた谷田部の中心地としての位置づけを検討した。

後背地の検討のために事例として選定した旧谷田部町上原集落の住民にとって、昭和40年代～50年代の谷田部市街は買い物やサービス受益のために不可欠の場所であったが、日用品を購入するような頻繁に訪れる場ではなかった。上原と谷田部のあいだには館野や榎戸といった低次の小中心地が存在し、上原住民の日用品の一部はそこで扱われていた。いっぽう、訪れる頻度は減るが、上原住民には買い物や「楽しみ」を求めて土浦に行く行動が見受けられた。つまり、上原住民からみた谷田部市街は、低次中心地である館野・榎戸と高次中心地である土浦との中間に位置する「中位中心地」であったということができる。農村部で生活を送るなかで住民はしばしば冠婚葬祭と向き合うが、上原住民においては、それらの諸行事を自宅での挙行から上位中心地土浦での挙行に至る過渡的な時期において、谷田部が冠婚葬祭挙行の場となった。

大正期、牛馬や荷車による谷田部と農村部の交易がさかんであった頃には、谷田部に多くの牛馬商が居住するとともに飲食店が10軒以上存在し、さらに芸妓の活動がみられるなど、谷田部には明瞭なにぎわいの光景が想定された。谷田部市街中央部に設置された牛馬獣霊碑建立寄付者を指標に

すると、谷田部町と交流を持つ農村住民は筑波郡の南部、とくに久賀村（後の藤代町・伊奈村、現取手市・つくばみらい市）や長崎村（後の谷和原村、現つくばみらい市）など谷田部市街の南西部に大きく広がっていた。それに対し、谷田部町からみて北東方面（後の大穂町や桜村、現つくば市）との交流の広がりには小さかった。

谷田部市街の特色をみると、市街地が谷田川右岸の台地端を中心に「内町」、同川左岸の低地から台地にかけて「台町」が成立し、内町と台町を結ぶ道は迂回路が乏しい「一本道」の状態であることが基本型であった。この地形条件は、谷田部市街における東西両端の遠見遮断として機能するとともに、旧谷田部領内の道路配置が谷田川の低地を軸として、南西側と北東側にある程度の「対称性」を持たせている。谷田部市街は、この道路配置の要の位置に立地している。

谷田部市街の商店数は、昭和50（1975）年の92軒から平成26（2014）年の33軒までに著しい減少をみせている。取扱い業種の如何に関わらず、小売業として物品の販売を行う店舗の減少が認められるなかで、サービス業の店舗は昭和50年から平成3（平成3）年にかけてかなりの増加がみられるなど、他の業種とは異なる動向が認められた。また、小売り機能に比べれば、卸売機能は残存する傾向が認められる。モータリゼーションが進行するなかで谷田部では駐車場規模が小さいなどの問題もあるが、当地では土地・店舗ともに自己所有で職住一体の比率が高いことが、商店廃業後に住居として利用され続け「シャッター街」化が進む一要因として指摘できる。

大正期の谷田部市街を当時の広告から検討すると、米穀、肥料、燃料、呉服、洋品、履物、塩、鮮魚、乾物、煙草、和洋酒、茶、菓子、薬、書籍、文具、自転車、マシン、陶磁器、荒物、小間物、材木などを販売する商店が存在し、谷田部市街全体で多様な需要に応えられる商店構成であることがわかる。このほか、銀行、保険、医院、印刷、旅館、料理店などサービス業の店舗も充実している。数量的には料理店が10軒以上存在するなど、

質と量の両側面からみて、谷田部は商業・サービス業の拠点であったと判定される。谷田部市街が有する娯楽機能については、市街中央部に立地していた劇場兼映画館に着目し、興行状況を具体的に検討した。その結果、昭和40年代～60年代にかけて中央で活躍する著名な芸能人が谷田部を訪れ、興行を行っている様相が示された。この劇場に掲げられた谷田部各商店の宣伝広告版をみると、薪炭の時代から次第に石油類の重要性が増し、並行して自動車時代が到来するという移行期の店舗状況を読み取ることができる。

谷田部と競合する他の中心地との関係をみると、谷田部には近世における陣屋所在地の機能を引き継いで、近代において郡役所が置かれたことが特筆される。郡役所の存在が他の管理行政機能を引き寄せ、谷田部には税務、郵便、警察、裁判、学校などの諸機関が立地した。ただし、谷田部の諸官庁は土浦の支所として置かれるなど、新治郡役所所在地である土浦より上位に相当する管理行政機能は設置されなかった。

営業税額や商工人名録など明治・大正期における経済活動から谷田部の特色をみると、谷田部にはかなりの経済活動の集積が認められる。それは、決して小規模な水準ではなかったが、谷田部町が属する筑波郡内で比較すると、首位の座ではなかった。筑波郡内では、郡役所を持たない北条町が経済活動では第1位であり、それに次ぐ中心地は上郷村である。谷田部町は、経済活動では第3位という位置づけであった。これは、明治・大正期における谷田部町が政治行政機能に特化しており、それに比べて経済機能の強度が小さいことを示している。すなわち、明治・大正期の谷田部は筑波郡第3位の重要な中心地であることは事実であるが、その性格は経済的中心地という以上に政治行政的中心地という意味合いが大きかった。

このような谷田部町において、昭和1（1926）年の郡役所廃止は打撃となった。昭和期の第二次大戦前には、海軍谷田部航空隊といった大規模施設が谷田部に設置され、一時的に谷田部に活況をもたらした。しかし、敗戦により軍事施設は廃止

となった。このような背景があつて、昭和42(1967)年と昭和50(1975)年に実施された茨城県商工部による商店街診断では「経営努力の不足」など、辛口の勧告につながった。単に、モータリゼーションの進展や研究学園都市建設による新商業地の出現だけが谷田部市街の盛衰に影響をもたらしたものではない。

以上を通し、谷田部市街にはかつて多様な業種の多数の店舗が並び、駄馬を連れ荷車を曳く人々が行きかう「にぎわい」が存在したことが明らかになった。にぎわいのある時代には10軒を超える料理店が営業し、芸妓の存在もみられた。時代は下るが、谷田部に存在した劇場兼映画館や相撲興行などの催し物も、谷田部ににぎわいをもたらした。ただし、谷田部は政治行政機能が強い町であったために、経済機能は筑波郡内の首位には至らなかった。昭和期に入り、主要行政機関である郡役所が廃止されると、谷田部市街への影響は大きかったものと考えられる。

今日の谷田部市街をみると、歴史や由緒を持つにも関わらず、残念ながら精彩を欠く感がある。この背景として、モータリゼーションへの対応の遅れや学園都市建設による新商業地の出現ももちろん関係があるが、谷田部市街存立の核であった高次の政治行政機能を持つ郡役所を失ったことが根本要因として指摘できる。それとともに、谷田部繁栄の後背地としてかつて重要な位置を占めていた谷田部市街の南西方向の地域—具体的には今日の取手市やつくばみらい市—と谷田部地域との交流が乏しくなっていることも、谷田部市街の活気が減少した一要因であると考えられる。

## 付 記

本稿の作成にあたり、文書所蔵者である飯塚 護氏、秦 正良氏、秦 弘子氏には快くご了解をいただき、絵図類の閲覧・撮影・転載をお認めいただいた。また、旧谷田部町在住の方々をはじめ、多くのつくば市民の方々からご教示をいただいた。(株)STEPの竹島由美子氏、野口建設の野口 久氏、野口理容の野口みよ氏、農業・元上原区長の沼尻丈夫

氏、理容大正軒、玉川堂の玉川進一郎氏、沼屋本店の沼尻和浩氏、スドウ酒店、茨城県立土浦工業高校の荒木利巳氏、齋藤 匡氏、根崎孝志氏、相撲博物館の土家喜敬氏、つくば市教育委員会の石橋 充氏、つくば市商工会の鈴木 誠氏、つくば市谷田部郷土資料館、牛久市中央図書館、茨城県立歴史館各位には、ご多用のなか聞き取りに応じていただいたり、資料収集にご協力いただいた。みなさまと各機関のご親切に感謝し、厚くお礼を申し上げる次第である。

## 注および参考文献

- 1) 谷田部の歴史編さん委員会編『谷田部の歴史』谷田部町教育委員会、1975年。
- 2) 谷田部町解散記念事業実行委員会編『さらに大きく より豊かに—谷田部町解散記念誌』谷田部町、1987年。
- 3) 高橋伸夫・村山祐司・松村公明・吉村忠晴・側島康子「つくば市における商業地域構造の変化」地域調査報告14(筑波大学地球科学系人文地理学研究グループ)、1992年、43~64。
- 4) 前掲1) 122。
- 5) 所属郡は当初河内郡であったが、明治29(1896)年、郡の再編が行われたことで所属郡が変更され、筑波郡となった。
- 6) つくば市ホームページ(<http://www.city.tsukuba.ibaraki.jp/index.html>) (最終閲覧日2014年2月8日)。
- 7) a. 茨城県教育委員会編発行『筑波研究・学園都市地区民俗資料緊急調査報告書』1968, b. 大島暁雄・松崎憲三・宮本袈裟雄・藤田稔編『日本民俗調査報告書集成 関東の民俗 茨城県編』三一書房、1994。
- 8) 上原地区の有線電話は水海道支局である。利用時間は朝7時から夜8時までであった。昭和30~40年頃に有線電話から農村集団電話へと変わっていく。その家がどの時期に電話を使い始めたかは、電話番号をみればわかる。
- 9) 土浦市史編さん委員会編『土浦市史 民俗編』土浦市、1980。
- 10) 前掲7) 274。
- 11) ここでの上原の家は、上原に古くからあるといわれている36軒をさす。この家は、現在の上原組合員である。
- 12) 前掲7) 269~270。
- 13) ここで使われている高膳は、上原集落の共有膳椀

- である。共同の蔵がないため、現在は「沼尻先生」の家にしてある。
- 14) この写真は、昭和30年代に谷田部婦人部の活動として製作された映画「荷車の歌」の一場面である。JAつくば市谷田部女性部30年史編さん委員会編『女性史30年 歴史を紡いだ女性たち一畑を自然の美術館として一』JAつくば市谷田部女性部、1997年、9。
  - 15) 前掲1) 159～161。
  - 16) 前掲6), 「第2次つくば市産業振興マスタープラン参考資料」より。
  - 17) 沼屋本店・ストウ酒店各店 HP より。
  - 18) つくば市物産会 HP <http://www.tsukubabussan.com/iwata.html> (最終閲覧日2014年2月16日)
  - 19) 現地調査による。
  - 20) 茨城県立歴史館所蔵、茨城県編・発行『谷田部町「中央商店街」診断報告書』1975年
  - 21) 前掲3) 47。
  - 22) 前掲3) 47。
  - 23) 筑波教育会編『筑波郡案内記』筑波教育会、1919、42～52、巻末広告
  - 24) 池田雄蔵編『映画便覧 1960年版(映画年鑑1960年版別冊)』時事通信社、1960、52～57。
  - 25) 木村昭二「木村昭二のペンとカメラによるなんじゃもんじゃばなし 連載第13回 さようなら玉川館」筑波の友73、STEP、1992、18～21。
  - 26) 明治43(1910)年には土浦税務署に統合される。
  - 27) 前掲1) 130～132。
  - 28) 筑波町史編纂専門委員会『筑波町史 下』つくば市、1990、683～686。
  - 29) 商工社編・発行『増訂五版 日本全国商工人名録』1914年
  - 30) 茨城県立歴史館所蔵、茨城県編・発行『谷田部町中央商店街診断報告書』1968年
  - 31) 前掲20)。